
きし☆むすっ！～恋する乙女は愛する騎士で～

スタジオぽこたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

きし☆むすっ！〜恋する乙女は愛する騎士で〜

【Nコード】

N8324X

【作者名】

スタジオぽこたん

【あらすじ】

旧タイトル『わんわんお！』レキⅡサ・ダブルファンク。双牙の称号を持つ少年は、とある使命を帯びて、とある都市を訪れていた。そこはかつてイリスの聖地と呼ばれ500年前の神魔戦争では決戦地として使用された場所。現在は人類の希望の星『アルビレオ』と呼ばれていた。少年はその都市で一人の少女と出会う。これは一つの約束と500年越しの思い。そして騎士道に殉ずる恋する乙女達の物語。

序章

樹齡千年を超える大樹がひしめく暗い森の中を、一人の少年が走る。

呼吸は乱れ、全身にひどい汗をかいていた。

心臓は高鳴り、喉は渇き、指先は震えた。

それは絶望的な死だった。

木々の間を縫うように走り、走り、走り――

「――ッ！！」

少年が咄嗟に頭を下げた。さっきまで頭をあつた空間を鋭い牙が喰らいつく。歯と歯が噛み合わさるにしては、ゾツとするような金属音を響かせ、周囲には火花が散った。

少年に噛み付こうとしたのは、見上げるほどに巨大な狼だった。暗い森の中なのに、その漆黒の毛並みは、まるで光を発しているかのように、絶大な存在感を放っていた。

巨大な四肢に、巨大な胴、鋭い牙が並ぶ大きな口は、少年の体を一飲みに来るそうなほどであった。

「くッ」

紙一重で死を避けた少年は、避けた動作の反動で危うく転びそうになったが、その流れに逆らわず前へと跳んだ。

地面に片手をつきながら前転し、全身でしなやかに衝撃を吸収しながら、再び走り出そうとした。

巨大な狼は、そうはさせじと太い前足で、前方を薙ぎ払う。

少年は向かって左の大樹を強く蹴り、三角跳びの要領で今度は右へと大きく跳んだ。

鋭い爪が少年を掠めながら大樹に激突した。大樹は粉々に爆散し、木片が鋭い矢のように飛び散る。少年は腕で顔を庇いながら、転がるように走る。

先ほどから何度も何度も、後一步の所で獲物を取り逃がしていた狼は、怒りに満ちた咆哮を上げながら少年を追った。

「はぁ、はぁ、はぁ」

少年は大きな獣道を逸れると、細い獣道へと飛び込んだ。

そこは大きな大樹に挟まれた非常に小さな獣道で、あきらかに巨狼が通れるサイズでは無かった。

だが、怒りに狂った巨狼は、立ち塞がる木々の全てを薙ぎ払い、少年を追いかける。

少年は腰に大型のナイフを帯びていた。

だが今のこの状況では、天地がひっくり返っても、この狼には勝てはしない。少年はそれを良く理解していたし、狼もそれを良く理解していた。

この『太古の森』と呼ばれる場所では、人間は捕食される側なのだ。

少年は走る。

やがて、開けた広い空間に出た。

巨大な大樹で囲まれ深い海の底のように日の光が届かない暗闇の森で、そこだけは優しい日の光が差していた。

美しい花が咲き乱れる花畑。まるで場違いな光景。

だがそこは、逃げ場の無い袋小路、逃避行の終わり、袋の鼠であった。

濃厚な死の気配、獰猛な獣の息遣いが、すぐ背後にまで迫って――

序章（後書き）

はじめましての人は、はじめまして。お久しぶりの人は、お久しぶりです。

スタジオぽこたんです。

1節

1

暗い夜の街道を一人の少年が歩く。正確には一人と一匹だ。

広大な森林地帯を抜けると、眼前には見渡す限りの巨大な都市が存在した。インジス大陸の北方に位置するこの都市国家は、四大家の何処にも属さず、中立を保ち発展して来た。他国に比べて税制面で優遇され、国家や所属に関係なく誰もがチャンスを得られるこの都市は、自然と多くの商人や冒険者が集まり、やがて流通の中心、商業の要、世界の中心へと成長した。

都市の名前は『アルビオレ』天空の宝石という名を冠した豪華絢爛な大都市は、聖地イリスの首都として、夜の闇の中でも煌びやかに輝き、天に輝く星々に負けない、まさに宝石のような輝きを放っていた。

「見て、ティンクあれがこれからボク達が暮らす都市だよ」

茶褐色の外套を纏った冒険者風の少年は、胸元を優しく撫でる。

すると少年の胸ポケットから、銀色に輝く羽を生やした一匹の妖精が現れた。

「こ、これが街なの？ 見渡す限り光の海じゃない!？」

ティンクと呼ばれた妖精は、驚きに目を丸くした。

彼女は、アールブと呼ばれる精霊に近い妖精族の一種で、とても希少な存在だ。名前ティンク。レキの相棒を務めている。

光の粒子を放つ水色の髪に、銀色に輝く羽、手の平に収まるほど小さな少女の体には、綺麗な花のような短い丈のワンピース、腰の部分にある大きなリボンが特徴的だ。

「うん、すごーい大きな街だね。きっと強い人が一杯居るんだろうな」

まだ見ぬ強敵に胸を躍らせる少年。

「もう、レキってばそんな事ばかり言って……いつか絶対大怪我するよ？　っていうか既に怪我が絶えないよね！？　いつもいつも治療するこっちの苦勞も考えて欲しいのだけど？」

ティンクは少年の鼻先を飛び、まるでお姉さんのように腰に手を当てそう言った。

「それについては感謝してるよ。いつもありがとねティンク。でも、人を狂戦士みたいに言わない欲しいな。ボクはただ純粋に戦うのが楽しいだけで、血を見るのは結構苦手なんだよ？」

「なによそれ、菜食主義者だけど、狩りが大好きってくらい矛盾してるわよ？　バカじゃないの？」

「む、むう……ティンクは女の子だから、男のロマンは理解し辛いかもね」

「ふーん、男のロマンねえ……女の子みたいな顔してよく言うわ」

「ううう、それ一番気にしてるのに……ティンクの意地悪！」

幾ら鍛えてもこれ以上筋肉はつかないし、ここ一年ほど背もほとんど成長しない。

——まさか、これ以上伸びないの？

と絶望しそうになるが、それでも絶望せず毎日欠かさず牛乳を飲んで居た。決して諦めない、それが少年の矜持なのだ。

ただ、

「ねえ、ティンク……。ここ数日、牛乳飲めてないけど背が縮んだりしないよね？」

さらさらとした猫毛気味の黒髪を弄りながら、レキは不安げな顔をする

「ダ、ダメじゃないレキ！　そりゃ縮むわよ。みるみる縮んでその内、女の子になっちゃうから！」

悪戯好きの妖精は、純粋な少年に嘘を教える。

「ええええええ！！？」

レキは泣きそうな声でそう叫ぶと、しょんぼりと肩を落とす。そ

んな表情も仕草もグッと来るほどに愛らしいのだが、少年はその事に気がつかない。

ティンクはそんな少年を優しく見つめながら、以前起きた『眠る少年の股間事件』を思い出した。眠るレキの下着の中に巨大な蛇が入り込んだと勘違いし、ティンクが一生懸命に引っ張り出そうとした事件だ。勘違いが生んだ悲しい事件であった。

女の子のような顔とは正反対の、絶大なる男の武器を装備している少年。それはきっと、どんな男よりも男らしいと思える凶器であったが、それを少年に教える事は無い。

「だって調子に乗るに決まってるんだから……」

ティンクは小さな声でそう呟いた。

「ん、何か言った？」

「ううん、なんでもない！　そ、それであの街に、私が入学する学校があるの？」

ティンクは赤くなった顔を隠すように、話題を変えた。

「うん、そうだよ」

太陽の女神イリスを主神として崇める聖地イリス。その首都であるアリビオレには500年以上の歴史を誇る有名な神学校が存在する。そこでは身分に関係なく高水準の教育と、巫女としての修行が出来る場所として、民間にも広く門徒を開いている。

「人族と一緒の学校なんて、やっぱり嫌だよ。ねえ？　レキ……」

ティンクはおねだりするような甘い声を出すが、

「ダメだよティンク。ボクの役目は、君を守り届ける護衛なんだから」

レキは手の掛かる妹に接するように、きっぱりと言い放つ。

「でも、予定よりもすっかり遅くなっちゃったね」

あたりは真っ暗だ。日が沈み、既に何時間も経っている。本来なら昼には到着していたはずだった。

「ねー、じゃないよ！ もうレキったら戦いだすと止まらないんだから！」

「ごめんごめん、でもレッドクラブの亜種なんて超珍しい魔獣、ほっておけないでしょ？ それにこの甲殻からナイフを削り出したら、きつと良いのが作れるよ♪」

少年は嬉しそうにリュックに突き刺さる大きな蟹の爪を見る。

——楽しかったなあー♪

レキは戦いを思い返して、顔を綻ばせた。

「はあ……ダメだこの子、早く何とかしないと……」

ティンクはそう呟くと、真剣に頭を悩ませた。

「ほらティンク、門が近づいてきたから隠れて」

「はあーい」

ティンクは素直に返事をする、慣れた感じでポケットに隠れた。少女には大きな弱点がある。

過去の経験がトラウマになり人間に対して強い恐怖心と嫌悪感を持っている。その症状は重くレキ以外の人間には決して本当の姿を晒そうとはしない。レキが人前に出るときは、このように隠れるか、別の姿に変身している。

「ねね、街に着いたら美味しいもの沢山食べさせてね！」

ポケットの中からティンクが、楽しそうに囁いた。

「うん、わかったよ」

こうして二人は、聖地イリス。その首都アルビオレへと無事到着した。



「レキい……まだ宿屋見つからないのお？　もう二時間は探し回ってるよ？」

少年の肩に座るティンクは、だるそうにため息を吐いた。

「よ、予想外だよ……」

現在アルビオレは、神学校の受験期間であり、各国から大勢の人、人、ただでさえ多くの人で賑わう大都市は、まるでお祭り騒ぎの様相を呈していた。その為宿はどこも満員御礼状態で、何軒も探し回ったが結果はこの通り。

「お腹すいたし……先になにか食べるお店でも探そっか？　あ、この酒場って牛乳置いてるかな？」

「知らなあゝい。……私眠いから先に寝てるう、おやすみレキ、宿探し頑張ってね」

ティンクはそう言うのと、レキのポケットに飛び込み「んゝ」と背伸びした。

「ボクも眠いの……」

レキは恨めしそうに呟く。ただ、知らない街で野宿するのは、極力避けたかった。街の外で野宿する場合、危険なのは魔獣とかのモンスターよりも、実は野犬が一番危険なのだ。人に馴れて野生化した犬は、人を恐れない。それは魔獣よりも狼よりも、よほど危険な存在だった。

それでも知らない街で野宿するよりは、街の外の方が『安全』だとレキは思っている。魔獣よりも、狼よりも、野犬よりも、結局『人間』が一番危険なのだ。少年はそれを良く知っていた。

「寝てる所をズブツとされたらたまらないもんね」

夜だと言うのに、あまりの人の多さに辟易したレキは、半分あても無く街を彷徨っていると、いつの間にか大通りから外れ裏路地へと迷い込んでいた。綺麗な満月が雲に隠れると、街頭の無いこの辺り一帯は、夜の海のような暗闇に包まれる。

「あれ……ここ、さっきも通らなかった？」

都市の区画整備され計画的に建築された建物は、何処も彼処も同じに見えた。暗さがそれに拍車をかける。

レキは、完全に道に迷っていた。

「うう、来て早々迷子とか勘弁してよお……」

眠いし、お腹は減るし、牛乳はまだ飲めそうにないし、レキは泣きそうな気分だった。

頼りの相方は気持ち良さそうに寝てるし、こんな事で起こしたら絶対に怒られるし、馬鹿にされる。

——起こすのは絶対止めておこう。

ふと、人の気配を感じた。少年は気配のある方向へと足を進め、路地の角を左へ曲がる。

思った通り人がいた。

暗がりで見えないが、体つきから女性だとすぐに判った。ブーツの踵を石畳の地面をコツ、コツと響かせ歩く一人の女性。

——この街の人かな？

レキは道を尋ねようと、女性に後ろから近づき声をかけた。

「あの、そこのお姉さ——」

1節（後書き）

11／1 大幅に加筆修正。

2節

2

出会いはいつも唐突だ。

夜の闇を切り裂くように刃がきらめく。それは目にも留まらぬ早業だった。冷たい刃の感触が己の首筋に存在するのを、少年は文字通り肌で感じていた。

少年の名は『レキ』15歳程度の背丈で、まるで少女のようにあどけない顔立ちに、猫毛ぎみの黒髪。旅人が良く使用するこげ茶色の外套に黒いブーツ。一見すると何処にでも居る冒険者風の格好をした少年は、今まさに生命の危機を迎えていた。

「動かないで下さい。少しでもおかしなマネをすれば首が飛びますよ」

鋭い刃を、レキの首筋に押し付ける女性は、殺気に満ちた声でそう言った。

レキはとある都市の、とある暗く薄汚れた裏路地に居た。何故こんな場所に居るのか――は、道に迷ったからである。

既に日が落ち、辺りは真っ暗だ。特に街灯の無い裏路地であるこの場所は、まるで夜の海のように漆黒の闇に包まれている。だといふのに、首筋に当てられた刃だけが、鈍い光を放つ。

「……………」

対する少年レキは、咄嗟の事態に反射的にナイフを抜きかけ――動きを止めた。半ば以上まで鞘から抜かれたナイフを持つ少年の手には、じつとりと汗が滲む。それはまぎれも無い『恐怖』あと数ミリでもナイフを引き抜けば、即座に死ぬ。その確信にレキの体は麻痺したように動けなくなる。胸の鼓動が高まり、息が苦しい。な

のに――

「武器を捨てなさい」

それは、透き通った天使のような美声。呼吸すら躊躇われる緊迫した状況だというのに、レキはその声に聞き惚れていた。

そして胸の鼓動が、恐怖によるものでは無い事に戸惑う。

「……警告はこれで最後です。武器を捨てなさい」

首筋に押し当てられた刃に力が籠められた。首筋に鋭い痛みが走り、ほんの少し血が溢れる。流れ出た血は、首先に押し当てられた刃に赤いラインを描きながら地面へと落下し、地面へ鮮やかな血痕を刻む。

「……………」

レキはナイフを完全に引き抜くと、ゆっくりと手を開いた。物理法則に従い甲高い金属音を響かせて、地面へと突き刺さるナイフ。武器を捨てた事で、女性が小さく息を吐いた。ただのそれだけなのに、レキの心臓はうるさい位に鼓動した。

「私の質問に素直に答えれば、これ以上の危害は加えません。誰に……雇われましたか？」

「や、雇われた……………」

「……惚けても無駄です。たいした手並みでしたが……爪が甘いようですね？」

「えっと……ボクはただ、道を尋ねようと声をかけただけなんだけど……………」

レキは、乾く喉に無理やり唾を飲み込むと、何とか言葉を紡いだ。

「……………」

気まずい沈黙が辺りを支配する。

「ほ、本当ですか？ ウソを付くと為になりませんよ？」

「嘘じゃない、本当だよ！」

「では、貴方は何者です？ この私の背後をいとも容易く取るなん

て、普通じゃありえま——」

その瞬間、

女性が言葉をつむぐよりも早く、レキは腰に手を回すともう一本のナイフを引き抜いた。

少年の突然の凶行に女性は冷静に刃を、手に持つ『槍』を振るう。レキは構わずにナイフを投擲した。それは目にも留まらぬ早業だった。

レキが投擲したナイフは、女性を僅かに掠めると、そのまま裏路地の奥へと消え去る。

掠めたナイフによって切断された女性の数本の髪が、暗闇の中に黄金色の粒子を放ちながら宙を舞う。そんな光の粒子を切り裂くように、大上段から振り下ろされたのは、女性が振るった槍の一撃。容赦も呵責も無い、神の鉄槌が如き一撃は、尋常ならざる風の塊となり、轟音と共にその場に居る『者』全てを薙ぎ払った。

たった一人を除いて——

「手荒な真似をした事、まずお詫びします。私の早合点でした。どうかお許しください」

まるで爆心地のような惨状。その中心に立つ女性は、自らの腕の中に一人の少年を、レキを抱きかかえていた。

長大で重量級の槍を片手でささえる女性はレキを守るように、油断無く槍を構える。

そして、

「闇に潜み人命を狙う悪しき者よ。最早お前が敵う相手では無いと知りなさい。それでもなお、黒き刃を振るうのなら、戦乙女の名にかけて——覆滅します」

それは、とても静かな声だった。

だが、その声に秘められたるは絶大なる殺気。大気が震えるほどの圧倒的な殺しの圧力を受けた影に潜む者は、何も語らずただ静かにその場から姿を消そうとした。

「待ちなさい。それは……返してもらいましょう」

影に潜む者は、気配を消すその刹那、殺気を籠めて何かを放つ。それはレキが投擲したあのナイフだった。暗闇の中を高速で飛来したナイフを、女性は二本の指で白羽取りしてみせる。恐るべき業の冴えであった。

女性の活躍により、襲撃者は去り、脅威は無くなった。

だがレキは、とんでもない強敵に遭遇していた。首筋に刃を押し付けられてる先ほどよりも、よほど危険なこの状況に、レキは為すべが見つかからない。

少年の眼前、視界の全てを多い尽くすのは、暖かくて、ふわふわして、ムニムニして、指が食い込むほど柔らかくて、手では掴みきれないほど大きくて、とても甘く良い匂いがして、先端が少しコリコリってして、そんな凄まじい『兵器』が左右に合計二門つも備え付けられている。現在レキは、その深き谷間において、挟撃……挟み撃ちという全滅の危険を孕んだ圧倒的窮地に陥っていた。

「むー、むむー！　むー！」

つまり圧倒的肉壁、詳しくは言えないが世界最高峰の『おっぱい』に挟まれた少年は、羞恥と、興奮と、色んな要因が重なり——窒息寸前だった。

重量級の槍を片手でささえる程の臂力で、ムギューと胸の谷間に顔を押し付けられたレキは、溺れる者は藁でも掴むと言わんばかりに、女性の胸を揉みしだき、掻き分けて——

「ぷはあ！」

死と隣り合わせの桃源郷から、なんとか生還を果たした。

そして、羞恥と興奮と、己の『身体的』な要因から、逃げるように女性から体を離そうともがく。

だが、

「そ、そんなに……動かないで下さい」

それは、最初と良く似た言葉。

だが耳元で囁かれた女性の声は、最初の殺気だった声とは正反對の、とても可憐で優しい声。同時に女性の声には、確かな熱が籠められていて、見えずともその顔が赤面しているのが想像できた。

「ご、ごめんなさい！」

レキは、つい先ほどまで柔らかな白いお餅を、指で『ぶにぶに』していた。それは谷間から抜け出そうとする脱出行為であったが『ぶにぶに』していた事実は変わらない。それはもう念入りに『ぶにぶに』して、たまに『コリコリ』までしてしまった。

「……い、いえ……それよりも——」

ふと、首筋に何か柔らかい感触が触れた。それは暗闇の中でもわかるほど、純白のハンカチだった。

血がみるみる染みこんで行き、白い領域が黒く穢されていく。

そういえば、槍に刃先で首を少し切った事を、レキは今更ながらに思い出した。

しかも傷口からは、結構な血が溢れ出ている。

「本当に、んッ……ごめんなさい……」

女性は、少しだけ甘い吐息が混じった、妙に色っぽい声を出す。

「う、ううん、気にしないで……」

——だ、だって興奮して、出血量が上がっただけだし。

まさに鼻血と同じであった。

そんなレキの胸中とは裏腹に、気道を押さえない絶妙な力加減で的確な止血をする女性、そのハンカチを持つ女性の手は、今も微かに震えていた。

「あ、あの……本当に大丈夫だから」

レキは暗がりでも互いに顔も見えない中、目の前の女性を見つめた。暗闇の中、必死で相手の瞳を探る。そして——確かに目が合うのを、視線が絡み合うのを感じた。女性もまた、こちらの瞳を捜していたのだ。

ドクン――

それは果たしてどちらの鼓動の音だったのだろうか？

女性の胸に抱かれた状態のレキには、それが判らなかった。ただハッキリしているのは、自らの心臓の鼓動が、痛いほどに早くなっている事。それだけは間違いようが無かった。

これが二人の出会い。

舞台となったのは、淀んだ空気と、血の匂いが漂う真っ暗な裏路地。道を尋ねようと声をかけたら危うく殺されかけた。

少年の不注意と、少女の勘違いが生んだ、それはある種劇的で、これっぽっちも感動的で無く、ロマンスの欠片も見当たらない出会い。そのはずだった。

だが二人は、顔も見えないこの状況で、不思議と相手に強く惹かれるものを感じていた。そんな二人を祝福するかのように、分厚い雲の切れ目から、優しい月の光がさした。夜の帳が打ち払われ、二人の姿をくつきりと照らし出す。

「えッ――」 「あッ――」

闇が祓われ、二人は初めて互いの顔を確認した。

呼吸は乱れ、全身に汗をかいていた。心臓は高鳴り、喉は渇き、指先は震えた。

それは一目惚れだった。一目見た瞬間から、恋に落ちていた。

それは目を見張るほどの美少女で、歳の頃は16歳程度。手足を覆う白銀の部分甲冑と、青い戦乙女の戦装束が印象的だ。

黄金色に輝く美しい髪に、青い宝石のように綺麗な瞳。美の女神

でも嫉妬するほど整った目鼻立ちで、濡れたように艶やかな桃色の唇が、少女の美貌に強烈な色香を加えていた。

そして、目線を下げるとそこに飛び込んできたのは、犯罪的に突き出た大きな胸。年齢には不釣り合いなほど豊かに成長した胸の膨らみは、見事なまでの胸の谷間を作り出し、それが惜しげもなく晒されている。ただ見ているだけなのに、深い谷間に吸い込まれそうな圧倒的な迫力と吸引力を放っていた。

——え！？　こ、こんな凄いのをボク……！？

レキは思わず鼻を押さえた。

これ以上は危険だと思い、逃げるように目線を下げる。

だがそこに広がるのは、折れそうに細い腰から連なる魅惑のヒップライン。それを覆うのは驚くほど短い、超ミニ丈のプリーツスカート。見えそうで見えない超ミニスカと艶めかしい太ももで構成された禁断の三角地帯。絶対領域がそこには存在した。

更にふともも自体も一級の工芸品のように見事で、うっとりするような脚線美に、しなやかな筋肉、なのに女性的な肉感は一切失われていない。月明かりに照らされて白く輝く美肌がとても扇情的にうつつた。

——と、都会って凄いよ！

信じられないほどの美貌と、抜群のプロポジション。そして計り知れない色香を放つ美少女は、こちらの舐め回すような視線を受け、恥ずかしそうに身をくねらせる。太ももは擦りあわされ、胸は上下左右に揺れうごめいた。その絶大な破壊力に、レキはうめき声を上げる。

「そ、そんなに見つめられると……こ、困ります」

少女は恥らうように目を伏せる。

「ご、ごめんなさい！　ボク——」

言葉が続かない。喉がカラカラに渴いていた。

そして、

「「あ、あの――」」

二人同時に口を開き、二人同時に撃沈した。二人揃って真っ赤な顔になる。

だが、何を聞きたいかは不思議と互いに理解出来た。この少女が何を聞きたいのか何故だか理解できた。

「ボ、ボクは……レキって言います」

「わ、私の名は……ニフィルシス。どうかニースとお呼び下さい」
頭の中で何度も少女の名前をリフレインさせる。

「ニース……さん」「レキ……君」

お互いの名前を、噛み締めるように呟き、見つめあう。心臓の音が痛い位に響いてくる。

首筋に当てられた少女の手に、レキはソッと被せるように自らの手を置いた。

「あっ――」

ニースが小さな声を上げ、ビクツと体を震わせる。

「もう大丈夫だから、そんな辛そうな顔しないで？」

「いえ……ま、まだ血が完全に止まっていません……」

その声には甘く切ない響きが籠められていた。

傷口を押さえる少女の手は、レキの血で真っ赤に染まっている。

「少し皮が切れただけ、ちょっと大げさに血が出てるけど、本当に大丈夫だから」

「で、ですが……」

レキはニースの手を優しく握ると、ゆっくりと傷口から離し、自らの胸に彼女の手を置く。服越しからでも判るほど少年の心臓は力強い鼓動を響かせ、生命力に溢れてた。

「ね、大丈夫でしょ？」

「……レキ……君」

レキの行為に、ニースは頬を赤く染める。

そして二人は、おもむろに血で濡れる指先を絡めあう。それは酷

く淫らな行為を連想させた。濃厚な血の匂いの中、出会ったばかりだというのに、二人はまるで恋人のように熱く見つめあう。

ニースの方が背が高く、レキは熱いまなざしで少女を見上げた。そんな視線を受た少女は、艶やかな桃色の唇から、何かを期待するかのような甘い吐息が漏した。

「ニ、ニースさん……？」

少女の驚くほど甘い雰囲気、レキは息を飲んだ。少女はまるで発情期の雌犬のような有様に見えた。

レキは、女性経験が皆無で、異性に興味を持ったのも今回が初めてだ。

だが、少年の身に眠る戦いの『才能』は、一匹の雄としての秘めたる『力』は、まさに今この瞬間『目』を覚ました。

「レ、レキ君……？」

ニースもまた、生まれて初めて意識した異性に、胸のときめきを感じていた。

さらに眼つきの変わった少年に身の危険を覚えたが、体は甘く疼くばかりで一向に動こうとしない。

「……ボク、困ってるんです！」

剣士の中でも、短剣の類を愛用するナイフ使いであるレキは、基本的に無駄な攻撃はしない。

『殺す』と決めた時は、いつも必ず一撃で仕留めた。急所一撃、一撃必殺、まさにイチコロであった。

レキは、庇護欲をくすぐる愛らしいプリティーフェイスに潤んだ瞳という『刃』で武装し、上目遣いでリースを見上げ、

「今日……泊まる所が無いんです」

甘い声で囁くようにそう言った。

それは本当に宿に困っての発言だったが、少年の目覚めた才能がそれを鋭く尖ったナイフに変えた。

「……っっっ！？」

母性本能に突き刺さるようなその一撃に、ニースの顔が真っ赤に

染まる。

戦う術しか、殺す技しか、滅する力しか知らない、人の皮を被った『ひとでなし』は、まるで本当の乙女のようにうろたえた。

『戦乙女』は、若い男女が一つ屋根の下で『夜』を共にする意味を辛うじて察する事が出来た。

それは『契り』という行為で、『結合』という行為で、『雄と雌』という行為であった。

具体的な事は何も知らなかったが、それでもニースは、それがエッチな事であると知っていた。

だからこそ、

「……へ、変な事しませんか？」

リースは耳まで真っ赤に染めて、恥ずかしそうに言葉を紡ぐ。

「へ、変な事——」

知識は知らなくても、目覚めた雄としての本能が、自らの種を後世に残そうとする本能が、レキを不安にさせた。

なんとなく、この少女の巢に帰ったら、自分は酷い事をしてしまう気がした。

良くは判らないけどそう思ったのだ。

そんな思考を振り払うように、視線を彷徨わせ——大きく突き出したニースの胸へと行き着く。

レキは思わず喉を盛大に鳴らしてしまう。

——し、しまった！

そう思い、慌てて目を逸らす。

だが、

時既に遅く。レキの思考の中は『アノ』衝撃的な感触で埋め尽くされる。まさに魔性のおっぱいであった。

「——ッ！」

レキのある意味『負』の感情を、雄の視線を敏感に感じ取ったニースは、一瞬驚いた顔をしたものの、色んな感情の入り混じった『困った』表情を見せる。ただ、困ってはいいても、そこには少しの嫌

悪感も存在していない。それどころか少女の瞳は、何かを期待するように揺れ動く。

そんな少女の甘い空気を読みきった少年は、ただ一言。

「……ダメ……かな？」

その言葉がトドメとなった。

ニースはもう何も語らず、ただ耳まで真っ赤にしてレキの手を引いた。レキも黙したまま従う。

互いに顔を赤くし、裏路地を足早に歩む。その先に待つものを互いに強く意識しながら――

その時、異変が起きた。

前を歩くニースが、突然苦しそうに胸を押さえ、膝をつく。

「なッ!? どうかしたの! 大丈夫!？」

「い、いえ! 何でも……何でもありませんッ! んくう」

ニースはそう言うが、どうみても苦しそうだ。

だが、

「ご、ごめんなさい……わ、私――」

ニースは突然立ち上がると、その場で大きく跳躍した。

人とは信じられないほど高く、空に跳んだ少女は、少し離れた建物の屋上、その縁に降り立つ。

レキは慌てて声をかけようとした。

だが、金色の髪をたなびかせ月を背後に立つその姿は、とても幻想的で、少女の人とは思えないほどの美貌と相まって、まるで月の女神フィノメナの祝福を受けて戦う、戦女神ニースを描いた神話の壁画にそのものに見えた。

夢のようなそんな光景にレキは思わず見惚れ――獲物を捕らえる絶好のチャンスをふいにした。

ニースは一度だけ、切ない表情でレキを振り返ると、そのまま闇夜に姿を消した。少女が去ったその場には不思議な香りが、まるで絞りたてのミルクのような甘い匂いだけが残った。

2 節（後書き）

1
1／1 大幅に加筆修正。

3節

3

次の日、とある宿屋の一室にレキは居た。

「もう、レキってば！　いつまで落ち込んでるの！？」

少し拗ねた響きがこもった愛らしい声の主は、少年の肩にちょこんと腰かける小人のように小さな少女だ。

「別に落ち込んでなんか……はあ……」

レキは、盛大にため息を吐く。

現在少年の思考の大部分を占領しているのは、昨晚出会った一人の少女。まさに一目惚れだった。思い出すだけで胸がドキドキと高鳴る。ニースと名乗った少女の、凄まじい美貌に惹かれたのはあるが、なによりもレキを虜にしたのは少女の持つ計り知れない『力』だ。

——戦ってみたい。

一人の戦士として、騎士としてレキはそう思わずに居られなかった。

だが肝心の少女は、名前以外の何も知らない状態だ。

再びあの少女に出会えるのか？　そんな不安がレキの心に影を落とす。

この世は一期一会の出会いというものがある。どんなに会いたいと思っても、運命の悪戯なのか、決して巡り合えない相手というのが確かに居るのだ。レキは、チャンスを生かせない者の末路を嫌というほど見てきた。機会を逸するという事は、機会すら得られない者からしたら、それだけで罪深い行為なのだ。

「はあ……」

「ウソついても私には判るんだからね？　私がちよくと目を離れた

らスグに悪い女に引つかかるんだから！　これだからレキはぶんぶんっ！」

ティンクは、頬を膨らませて怒りを表現する。

怒ってる当人は兎も角として、それはとても愛らしい表情で、レキは思わず和んでしまう。

「なんでティンクってば、そんなに怒ってるの？　ほら、機嫌直してよ」

慣れた手つきで、ティンクの羽を優しく撫でる。

機嫌を損ねた相棒に最も効果的な一手である。

「な！？　べ、別に怒ってなんか！！　ただ母様からレキの事お願いねって頼まれてるからで、貴方の事なんて、なんとも思っていないだから！　か、勘違いしないでよね！」

ティンクは顔を赤くしてそっぽを向く。

そんな相棒に、レキは、

「ちゃんとわかってるって、だってティンクはアールブのお姫様だもんね。ボクだってこれでも感謝してるんだよ？」

レキは、気難しい相棒の、不器用な『慰め』に感謝しつつそう答えた。

肝心な部分を完璧に捉え違えてる少年。チャンスにすら気が付かないという罪深い者がここに居た。

「レキのバカ……鈍感……」

「何か言ったティンク？」

「な、何でも無いわよ！」

どうにも不機嫌なティンクにレキは困った顔になる。余程、神学校への入学が気に喰わないらしい。レキはそう思うことにした。

「そうだ！　せっかく街に来たんだし、お礼に何かご馳走するよ」
人間嫌いのティンクだが、妖精である生来の気質は変えられないらしく。実はにぎやかな街やお祭りなどが大好きで、甘く美味しい

ものにも目が無い。

アールブの姫の護衛者としてこの都市を訪れたレキには、重要な使命がある。

だが、相棒の機嫌を伺うというのもレキにとっては重要な使命であつた。

それに、レキ本人がこの巨大な都市に到着した時点で、使命の内容はほぼ完遂したと言える状態なのだ。

少しくらい寄り道をする余裕はあるとレキは判断した。

「本当ッ!? で、でも……用事の方は良いの?」

「うん、ティンクには日頃からお世話になってるし、それに本来の『予定』よりは早く来てるから少しくらい観光しても大丈夫だよ」

「やったー! 丁度行きたいお店があるの!」

ティンクは嬉しそうに羽をはためかせる。

なんだかんだ言っても、人族のお店をチェックをしている辺りに、彼女の妖精氣質が窺えた。

そして、

「少し待ってて! すぐ用意するから!」

慌ててバスルームへと飛び込むティンク。

しばらくして――

「お待ちせ!」

お出かけ準備万端のティンクが現れた。

それは手の平サイズの妖精姿とはまるで別人。アールブが『人』としての形態を取った状態のティンクがそこに居た。

レキは見慣れているのもう慣れたが、ティンクは絶世の美少女なのだ。

綺麗な水色の髪はそのままに、驚くほど長いまつ毛に、愛らしい瞳。誰もが羨む白い陶器のようにきめ細かな素肌。

美形が多い妖精族の中でも、アールブ随一と歌われた最強の美姫

がそこには居た。

ティンクの衣装は、一言で例えるなら『花のつぼみ』だ。

春に芽吹いた新芽のように鮮やかな翠色のビスチェ。ハーフカットで切られたブラの部分は、ティンクの控えめなバストサイズを一番効果的に魅せるよう完璧に計算された出来栄え。

総じてスレンダーな体つきの多い妖精族は、逆にそれを最大の武器として魅せる技巧において、他の追隨を許さない。

大胆にお腹部分を露出させ、腰履きで穿かれているのは、同じ翠色のミニ丈のプリーツスカート。スカートの下には白色のパニエ。ふんわりと花のように広がるミニスカートから覗く細く長い脚は、スレンダーながらも女性的な丸みを感じさせる脚線美で、中性的なその肉体に確かな色気を加えていた。

「……どうかな？」

少しだけ頬を赤くして、上目遣いでレキを見つめるティンク。

「良く似合ってるよ。でも……ちよっと露出度が高くない？」

正直レキは目のやり場に困っていた。

幼馴染ともいえる間柄なので、あまり異性として意識しないが、最近のティンクは本当に可愛らしくなったと思う。

——昔はただのお転婆姫だったのに……。

レキはそう思った。

「でも……レキってば、こういうのが好きなんでしょ？」

ティンクはそう言って、ミニスカートの裾を掴んで持ち上げて見せた。

ふわっと広がったスカートの奥に、純白の三角地帯が一瞬みえ——

「レキのえっち……」

してやったりという顔で、にんまりと笑みを浮かべるティンク。
悪戯好きの妖精の本領発揮であった。

レキはというと、

ポカッ——

「い、いったゝい！ 何するのよバカレキ！」

「お姫様なんだから、そういうハシタナイ事しないの！」

「うゝ……」

「ほら、バカな事してないで行くよ」

だがしかし、

「ねえレキ……何色だった？」

ティンクはレキの耳元で、ソツと囁くようにそう言った。

レキは反射的に顔を赤くしてしまう。

「あれあれゝ？ レキってば顔赤いよ？ もしかして私のパンツ見て興奮しちゃったの？ クスクスッ、レキのえっち♪ やっぱりこういうの好きなんだ？」

色っぽい仕草で、両手で太ももの内側に手を当てるティンク。

まるで経験豊富な淑女の様子を見せた。

「……もうボク一人で行くからね」

レキは顔を赤くして、さっさと部屋から出て行ってしまう。

一人部屋に残されたティンクは、

「私だって……恥ずかしいんだから……レキのバカバカ……」

レキが居なくなると同時に顔を真っ赤に染め、乙女の表情を見せる。

「早く治まって……」

胸を押さえながら小さく呟くと、高鳴る鼓動を抑えるために、一度大きく深呼吸する。

そして、

「こら、待ちなさいレキゝ！ ちゃんとおこって貰うんだからねゝゝ！！」

元気な声を響かせてティンクはレキを追った。
僅かに頬の赤みを残したまま――

3節(後書き)

加筆修正。

11／1 加筆修正。

4 節

4

「凄い、すごい！ 見て見てレキ！ こんなにおっきいなんて！」
「す、凄いね……これは……」

ハイテンションではしゃぐティンクと違い、レキは少し引き気味に『それ』を見つめた。

皿の上にそびえ立つ、それはまさに巨塔であつた。

それはハニートーストという名のスイーツで、ミルクとバターをたっぷり使って練り上げた焼き立ての食パンまるごとにはザックリと切り込みを入れ、そこに甘いハチミツをかける。そして新鮮なミルクで作ったバニラアイスをダブルで乗っけ、更に上から生クリームやキャラメルソースをデコレーションした贅沢な一品。

「どうです旅の方、このお店の名物は？」

声をかけてきたのは、この喫茶店の看板娘。何故か『メイド服』に身を包んでいる彼女は、栗色の髪を三つ編みにした活発そうな美少女だ。

非常に短い丈のスカートに、黒いガーターベルトがとても色っぽい

「――って、痛いよティンク！」

頬を膨らませえたティンクに、足をぎゅむーと踏まれるレキ。

「デレデレして……レキのえっち……やっぱり好きなんだ」

「ご、誤解だつてば！」

そうは言つたものの、昨晚ニースと出会つてからというもの、ティンクもそうだが短いスカートをはいた女性に、ついつい目がいつてしまう少年。これは一種のすり込みとも言える現象だ。惚れた相手が持つ性的魅力が、そのまま性的嗜好になるのは、良くある事柄だつた。

現に今もレキは、対面に座るティンクの短いプリーツスカート、その暗黒のトライアングに、少しでも気を許せば引き寄せられそうになっていた。

ティンクもまた、たびたび感じるレキの視線を受けて羞恥を感じているが、決して隠そうとはしない。それどころかレキだけに見えやすいように角度を調節していた。

「ふふ、仲が良いですね。ご注文の紅茶とミルクです。ごゆっくりどうぞ」

先ほどのメイド服の少女が、注文の品をテーブルに並べる。

「……なによそれ？」

ティンクがレキの注文のミルクを指差す。

「なにつて……牛乳だけど？」

「なんで、ジョッキかって聞いているのよ！ お腹壊しても知らないんだからね？」

「い、良いでしょ別に……ボクだって男の子なんだから、もう少し背が伸びたいお年頃なんだよ」

レキは恥ずかしそうに顔を赤くして、ミルクをゴクゴクと飲む。

「なんだか不純な動機を感じるのは気のせいからしら？」

「そ、それよりも、出来立てなんだから早く食べよ」

その言葉にティンクは「それもそうね」と呟くと、ナイフとフォークで上品にハニートーストを切りわけ口へと運ぶ。

「あ、美味しい♪ レキ、これ凄く美味しい♪」

「うん、本当に！」

二人は楽しそうに話しながら、ハニートーストという名の牙城を切り崩していった。

「ん〜♪ もう食べられない〜い」

満面の笑みを浮かべて、背伸びしながら街を歩くティンク。

「もう食べられないって、ボクに分まで食べといて良く言うよ」

後ろを追うように歩くレキは呆れた口調で言った。

「ふっふっ、レキの物は私の物なんだから、何も問題無いでしょ？」

ティンクはクルツと反転して、後ろで手を組みながら、可憐な笑みを浮かべる。

それは妖精族ならではの動きで、言ってる内容は兎も角、とても綺麗だった。

「それにしても……大きな街ね。少し大きすぎない？ 街を歩くのに注意する事が人とぶつかる事だって……どれだけ居るのよ」

ティンクはあまりに多い人の波に圧倒されていた。彼女の故郷では考えられない事だった。

「そうだね。これほど大きな都市は、他に類を見ないだろうね。でもねティンク……ここは500年前に一度、完全にこの大地から消し飛んだんだよ」

「え？」

「神魔戦争って知ってるでしょ？」

「当たり前でしょ！ 私のお母様の母様が、その戦いを経験してるんだから！」

「その戦争の決戦の地が『ここ』なんだ。かつてイリスの聖地と歌われ、500年前の神魔戦争では『最後の砦』として『終末の魔獣』と戦った英雄達の眠る地なんだ」

レキは目を閉じ、幼い頃から聞かされた英雄譚を思い出す。

「想像も出来ないよね……今じゃ世界経済の中心地になってるんだから……。そだけじゃない、来るときに見た広大な緑林地帯や、大きな湖も、全て人の手で作られたものなんだよ」

「あんな綺麗な森と湖が……？ 人間って……ただ壊すだけじゃ無いんだ……」

ティンクは己の無知を恥じるような顔をした。

こういう所が、彼女の最大の美点だとレキは思っている。そして手のかかる妹を見守るような暖かな目でティンクを優しく見つめた。

すると、

「な、何よその目は!？　レ、レキの癖に生意気よ!」

ティンクは眉毛を吊り上げて怒る。

だがその頬は照れてるのが丸わかりなほど、真っ赤に染まっていた。

「人も、中々捨てたものじゃないでしょ?」

「ふん……だとしても、私が何を嫌おうが勝手でしょ?」

拗ねた顔でそっぽを向く。

「ボクは、ティンクに嫌われたままってのは、ちょっと残念かな」

「な、ななな、な!？」

レキの言葉に、ティンクは顔を真っ赤に染めて後ずさりする。

「どうかしたの?　顔真っ赤だよ?」

「ッ!　な、何でもないわよ!　ったく……レキってば、本当はわざとやってない?　それともさっきの仕返しかなにか?」

「む、心外だなあ。こんなにもティンクを心配してるってのに、君はアールブのお姫様で、ゆくゆくは国を動かす存在なんだから、もっと人族とも仲良くしないダメだぞ。まあ……急には難しいだろうからボクで馴れていけばいいよ」

「……こ、この……鈍感……あ、あんな言い方……誤解しちゃうじゃない」

ティンクは赤い顔のまま、拗ねたように唇をとがらせ、小さな声で呟いた。

そして、

「人族は嫌いだけど……レ、レレ、レキは特別なの!」

ティンクは思い切って、自らの思いを口に出した。これが今のティンクに出来る精一杯の告白だった。

だが、

「あ、あれ……レキ?」

さっきまで目の前に居たはずのレキが居ない。

「おい！ ティンク！ こっちこっち！」

見ればレキが、露店の前で手を振っていた。

ティンクは、悔しいような、ホッしたような、なんともいえない表情をしたが、すぐにレキの元へかけて行つた。

それはガラス工芸を販売している露店だった。

巧みな技で作られた装飾品や、調度品、食器類の数々に、レキとティンクは目を輝かせた。

「凄く綺麗……まるで宝石みたい」

「うん、それにこの動物なんて、今にも動き出しそうだよ」

そんな二人に、店の主である老婆が声をかけてきた。

「おや、旅の方かい？ よくぞイリスの聖地へこられたのう、アルビレオはそなた達を歓迎するよ」

「……ねえアルビレオって？」

小声でティンクが言う。

「この街の名前だよ。『希望の星』という願いが籠められるんだ」

「へえ、そうなんだ。素敵な名前ね」

「良かったら何か買ってあげるよ？」

ガラス工芸はアルビレオの名産品で、世界的に高い評価を得ている。

「ほんとー！ 嬉しい！ どれにしようかなあ……」

前かがみで、商品を見つめるティンク。とても真剣な表情だ。

でも、短いスカートはいてるんだから、そんな体勢になったら――
――み、見えてるよティンクってば……。

レキは、周りからガードするように、ティンクの背後へと立つ。

そして、

「これ！ これにする！」

ティンクは三日月型のイヤリングを指差した。

「ほっほ……御目が高いねえ、それは……月の女神フィノメナを象徴した『月光のイヤリング』さ」

「月の女神って、神魔戦争で人類に味方した神々の一柱じゃない！」

「確か……太陽の女神イリスのお姉さんだよね」

「そうだね。我らが女神。愛と戦いそして創造を司る太陽の女神イリス様の姉君にして、この世界を救った三貴神の石柱さ」

老婆は、年齢の深みを感じさせる声で静かにそう言った。

三貴神、それは神魔戦争の折、滅びかけたこの世界を救うために、一人の聖女の祈りに応じて、女神イリスと共に光臨した神々。

神罰と、調停、そして勝利を司る戦女神ニース。

魔獣の母、獣の王、そして闇を司る混沌の女神アイリ。

破壊と再生、そして生と死を司る月の女神フィノメナ。

その凄まじき力で、英雄たちと共にこの世界を救った三貴神は、現在では女神イリスに並ぶ圧倒的な信仰の対象になっている。

「その坊やは、何か買わないのかい？」

フードを目深にかぶり、表情は見えないが、何かを感じさせる重みをレキは感じた。

そして、ふと目に止まったのは一つのペンダント。

透明色の球体の中に、まるで太陽をつめたかのように金色に輝くペンダント。陽光の反射を受けて一際輝いて見える。

「これを……」

レキは無意識にそれを指差していた。

「ほっほほ……これまた御目が高いねえ……。それはまさに、太陽の女神イリス様、その威光を表現したこの世に二つと無い傑作さ。銘は『太陽神の瞳』だよ」

「お幾らになりますか？」

レキはそう尋ねた。

だが、

「そうさねえ……今はまだ……と言っておこうかね」

「え？」

「差し上げると言っておるのじゃ。なに、心配せんでもガラスで作った安物さ。旅の方への贈り物といった所じゃな。土産物を買うさいは是非ともまた寄っておくれ」

老婆は楽しそうに笑いながらそう言った。

——なるほど、そういう意味か。

この老婆は、長年露店をやってる眼力なのか、レキ達がアルビレオを訪れたばかりだと判ったようだ。

そして、用事を済ませて帰る時には、また寄って土産物として沢山買ってくれば良い。つまり、食べ物売ってる露店が良くやってる味見と同じだ。レキはそう解釈した。

「ありがとうございます。帰りには必ず寄りますから」

「おばあさん、またね！」

「そうかい、そうかい。そりゃ……楽しみにしておるよ」

最後まで老婆の表情は、フードに隠れて見えなかった。

「ふふ、見て見てレキ、似合うかな？」

ガラス工芸の露店から離れたら、さっそくティンクは耳にイヤリングを付けて見せた。

綺麗な光沢を放つそれは、太陽の光を反射して、まるで本物の月光を放ってるようにも見えた。これがガラスで作られたとは信じられない思いだ。

「うん、とても良く似合ってる」

「うふ、ありがとレキ♪」

ティンクは上機嫌にステップを踏みながら歩く。だが突然立ち止まると、

「な、なによ……これ……」

ティンクの尋常ではない態度にレキは、彼女の駆け寄った。

「どうかしたの!？」

「レ、レキ……これ……魔道具だよ」

ティンクは耳に付けたピアスに、恐る恐る触れた。

「なんだって!？」

「神意の量が凄い上がってるのが判るの……こんなに強力な魔力強化の付加魔術が付けられた魔道具なんて、国宝級だよ!」

「まさか……それじゃこれも――」

レキは胸ポケットから、ペンダントを取り出した。

さっきまではガラス球の気配しか感じなかったのに、今手にあるそれからは、まるで太陽のように圧倒的な生命力が溢れている。

「レ、レキ! それ……凄いてレベルじゃないほどの生命強化の付加魔術が籠められてるよ!」

ティンクはとても優秀な魔術師だ。

彼女がそう断言するならば、間違いは無いだろう。

レキはティンクの手を掴むと、

「おばあさんの所に戻ろう」

「う、うん!」

二人は足早に、来た道に戻る。

だが、

「いらっしやい! いらっしやい! 何にしますか!」

老婆が居たはずの露店は、全く別のお店に変わっていた。

「あ、あの……さっきまでココでガラス工芸売っていた、おばあさん知りませんか?」

「何言ってるんだいお客さん! うちの10年間ここで露天商やってるんだぜ?」

店の主人は、怪訝な顔でそう言うと、訪れた他の客を相手に商売を始めた。

「レキ……探索の魔術にも引っかからないよ!」

「ティンク……気配を巡らせるから……衝撃に備えて」

「わ、わかった」

ティンクは慌ててレキから距離を取る。

レキは右太ももにある短剣を引き抜くと、地面へと突き刺した。

そして、

「きゃ!？」 「な、なんだ!」 「ビリッて来た!」 「突風でも吹いたのか?」

突然の衝撃に、人で賑わう市場は騒然となった。

こうなると予想していたので緊急時以外は、出来るだけ使いたくない技だが、今はまさにその緊急事態だった。

「どうだった……?」

「ダメ……見つからない。ただ……『この都市』には、もう居ないのだけは確かだよ」

まるで夢のように現実味に欠け、狸や狐に化かされてる思いだったが、二人の手元には国宝級の魔道具だけが確かに残されていた。

「……………」

そして、レキはとある方向をジッと見つめ、頬を赤く染めた。

気配を巡らせた時に、もう一人……別の探し人を見つけてしまった。

そう……見つけてしまったのだ。

「レキ……君?」

市場で賑わう通りのずっと先、人の目では目視出来ないほどの離れた距離、そこにレキの一目惚れの相手が、ニースが居た。

彼女もまた、レキの存在を敏感に感じ取っていた。

——運命の歯車がゆっくりと動き出す。

それは誰にも止める事が出来ず。巻き込まれる者は、ただそれが

運命だと思っしかない。

ただ……運命を切り開く者が居るとするならば、それはきっと他人への迷惑なぞ露とも思わぬ馬鹿だけなのだろう。

ここにも一人……そんな馬鹿者が居た。

4節（後書き）

世界観が見えて来たでしょうか？
胸焼けするように甘い物語を予定しております。

5節

5

レキは走る。

ただひたすらに走る。

上体を出来る限り低く保ちながら、地面と平行になるように大地を蹴る。速度は殺さないまま体の上下振動を抑え、両腕の力を抜く。自然と腕は背後へと流れた。

それは相手からこちらの武器が見えないように、すれ違いざまに即殺せるように、覆って、隠して、闇へと葬る為の歩法。

それこそが少年が出来る最速の歩法。『神行法』と呼ばれる戦闘用移動術。

茶褐色の外套をたなびかせ、人垣かき分け、レキは走って、走って、走って――

「突然立ち止まって、どうかしたのかいニース？」

そう言ったのは眉目秀麗な顔立ちの男。最高級の騎士鎧を着こなし、鎧の上からでも判るほど鍛え抜かれた体。腰に差された長剣は、それが飾りではない事を如実に物語っている。

「……………」

男の質問にニースは全く応じず、ただ熱い眼差しであさつての方向を見つめた。

その様子はまるで恋する乙女のそれで、騎士の男は驚いた顔になる。

「いったいどうしたと――」

そんな騎士の男の言葉をニースが遮った。

「……………」
「たった今急用が出来ました。申し訳ありませんが、ここで失

礼します」

言葉こそ丁寧だが、もはやニースの瞳には、目の前に居るはずの男の姿は欠片ほども映っていない。

今もあさっての方向を熱い眼差しで見つめていた。

男も釣られてそちらへと目を向ける。

そして、

「――下がちなさいニース！」

騎士の男はそう叫ぶと、腰の剣を引き抜き、ニースを庇う様に前へと立つ。

男の目に映る物、それはまさに『漆黒の狼』だった。

それは信じられない速度でこちらへと迫る。

「ヅッアア！」

刺客だと判断した騎士の男は、裂帛の気合と共に、なぎ払うように剣を振るった。

だが漆黒の狼は驚くべき事に、長剣の『下』をかくぐりると、前転して一瞬の内に男の懐へと入る。男は自らの間合いをあっさりと破られて蒼然となるが、くぐった修羅場の数が男の体を動かしていた。男は手の中で剣を反転させると、逆手に持ち替え懐に入り込んだ敵を串刺しにする為に振り下ろす。漆黒の狼は右手に持つ短剣を構えるが、男の剣速の方が速い。

男は勝利を確信した。

その瞬間、

焼け付くような鋭い痛みを右腕に感じて、思わず剣を落としてしまった。

男の剣を持つ右腕、その二の腕部分にナイフが下から突き刺さっていた。

「……見事だ」

右手の短剣は四で、死角に隠した左手のナイフで利き腕を殺された。

それは一瞬の攻防であったが、勝敗は誰が見ても明白だった。

「それほどの腕を持ちながら……残念でならないよ」

男は自らの命が絶たれる覚悟をした。

だが驚く事に、漆黒の狼は後ろへ飛び退くと何故かニースを守るように刃を構える。

そして、

「レキ君っ!!」

背後からニースに抱きしめられる漆黒の狼——少年という事実、男は更に驚く。

恐るべき刺客は、まるで少女のように愛らしい顔の男の子だった。

「レキ君だ。本当にレキ君だっ!」

「ちょ、ニ、ニースさん、まって……今は、むぎゅー」

ニースにギューと抱きしめられ、半ば抱っこされた状態の少年は顔を真っ赤にして叫ぶ。

「レキ君、怪我とかしてませんか？ 痛い所とかありませんか？」

「だ、大丈夫です。その、しいていうなら……周りの目が痛いかも

……」

まるで『ぬいぐるみ』のように抱きかかえられた少年に、周囲を歩く人々は生暖かい目を送っている。

「敵では無いのか……？ なんにせよ……騒ぎにならずにすんだな」

先ほどの戦いは、あまりに一瞬の出来事で、誰も気が付いていないようだ。

男は剣を回収し鞘へと納めると、真っ赤な顔でデイベア扱いされてる少年と、見た事もないような満面の笑みで少年を抱きしめるニースを眺め、

「……すまないが……どういう事なのか説明してくれるかな？」

酷く痛む腕を止血しながら、疲れたようなため息を吐いた。



「ほお、それでは昨晚ニースを救ってくれた英雄殿とは君の事だったのか？ おっと失礼した。私の名は Rond。Rond II ザ・アイアンシールド。鉄壁の称号を持つ。盾騎士だ」

盾騎士と聞いてレキは「あれ？」という表情を浮べた。
それを見た Rond は、

「今日は非番でね、あいにく盾の持ち合わせがなかったのさ」
片目を閉じてそう言った。

「そうだったんですか……」

「私の本領は『盾』の扱いだからね。良ければ君の名前も教えてはくれないか？」

「あ、ごめんなさい。ボクの名は……えっと……レキ。レキって言います」

「ふむ……」

盾騎士 Rond は、何かを探るような目でレキを見つめたが、ふとニースに目を向けると、

「レキ君の事は判ったが、君達はいつの間にそんなに仲良くなったんだい？」

Rond は、含みのある様な笑みでそう言った

「えっと……」

「プライベートな内容は答える義務は無いかい？ でも、私には聞く権利があるのさ。何故なら私は——」

「Rondッ！」

Rond の意図を察したニースは、顔色を変えて怒鳴る。

だが Rond は彼女を無視して言葉を続ける。

「私はニースの婚約者なのさ」

「え……」

その言葉を聞いた瞬間、レキは頭の中が真っ白になった。遅れて
込上げて来るのは胃がムカムカするような得体の知れない感情。

「ち、違うのレキ君！ ロンド！ 今の言葉……すぐに訂正して下
さい！」

「断ると言ったら？」

「絶対に——許しません」

リースは顔の表情を消すと、槍の先端をロンドへ向ける。

「味方に刃を向けるとはな。騎士にあるまじき行為だぞ……ニース」
「虚偽の罪を犯した同僚を悪の道から救い出すのも騎士の務めです。
それに……騎士道は私と共にあります。どうあるかは私が決めます」
ニースから、湯気が立ち上るように、ゆっくりと殺気があふれ出
ていく。

そこへ、

「ロンドさん……」

割って入ったのはレキだった。

ゆっくりとした歩みで、一歩づつロンドへと歩み寄る。

その時ロンドが感じたのは、『万軍』に囲まれたかのような圧倒
的なプレッシャー、信じられない重圧だった。

それは戦場に立った経験があるからこそ判る感覚。『絶望』とい
う名の生々しい死の感覚だった。

ニースも驚いた顔でレキを見つめる。

「ボクは——」

「わ、わかった。もう良いレキ君！」

「いいえ、良くななんて無いです！ 例え貴方がリースの婚約者だと
しても——」

「冗談だよレキ君。私が悪かった！ 悪ふざけが過ぎた！ いやあ、
やられた右腕の仕返しのためだったけど予想以上に二人共初々し

くてねえ、つい調子に乗ってしまったよ。はっはは——」

ロンドの乾いた笑みが虚しく木霊する。

「……ねえ、ニースさん」

「なんですかレキ君」

「やっちゃっても良いのかな？ この人」

「ええ、勿論です」

天使のような笑みを浮べてニースは言った。

「皆して酷い扱いだな。それよりレキ君」

冷や汗を浮かべながら、ロンドはレキの名を呼んだ。

「なんです？」

「嫉妬は……最高のスパイスだったろう？」

「っ！」

レキは顔を真っ赤に染めた。

「まったく……レキ君は、見てて飽きないな」

そこにニースが、

「……嫉妬とはなんです？」

可愛らしく首をかしげて言った。

ロンドは「あちゃー」と額に手を当て天を仰ぐ。

「やれやれ、騎士姫殿下にも、いずれ判りますよ。こういうのは百聞は一見に如かずと言いましてね。経験しないと判らんもんです。なあ少年」

ロンドは馴れ馴れしくレキの肩に手を回した。

「……し、知りませんよ、もう」

「だってほら、あちらの彼女はレキ君の連れなんだろう？」

ロンドが目線を向けた、その先には――

「こーらあああー！！　れきいいいいー！！」

怒り心頭のティンクが、おっかなびっくり人込みを掻き分けてこちらへと近づいてきていた。

——し、しまった。ティンクの事すっかり忘れてた。
そんなレキを横目にロンドは、

「あれは……墓守りの一族……となるとやはり……」
何かを確信したような目でレキを見つめた。

彼の手が震えている事に、その場に居る者は誰も気が付かなかった。

5節（後書き）

こんばんわスタジオぽこたんです。

一人称は、心の心情を描くのが凄い便利でしたが、大勢が動く場面がとても難しかったです。

三人称は、その反対って感じ。

さっそくお気に入り登録や、感想くれた方、ありがとうございます。
今度ともよろしくです。

6節

5

「レキのバカバカバカッ！ あんな人の多い所でレディを放置するなんて信じられない！ 騎士失格！ レキのあんぼんたんッ！」

怒りに高潮した頬に潤んだ瞳。種族的特長であることがった耳も怒りのためかピンツと上を向き、全身で怒りを表現するティンク。

「ご、ごめんティンク！ 決して忘れて……忘れて——えっと……」
「忘れて？」

「忘れてました……ごめんなさい」
しょんぼりして頭を下げるレキ。

そんな少年の腕をティンクはギュッと抱きしめて、

「ダメ、許してあげない……」
泣きそうな声でそう言った。

余ほど寂しかったのか、目尻には涙が浮かんでいる。

「本当にごめんね」
レキはそんなティンクの頭を優しく撫でる。
すると、

「……ちょこばふえ」
「え？」

「ちょこばふえなるものを、食べさせてくれたら……少しだけ許してあげる！」

「さっきあんなに食べたじゃない！」
「お、怒ったらお腹すいたの！」

ティンクは少し頬を赤くしてお腹を押さえた。

「……もう、お腹壊しても知らないよ？」

「レキに半分食べて貰うもん！」

「ええ、ボクまだお腹一杯だよ？」

「ふん、お仕置きなんだから、付き合いなさい」

調子を取り戻したティンクは、レキの腕を掴みながら意地悪な笑みを浮べる。

そんな二人は、仲の良い兄弟にも、親友にも、そして恋人同士にも見えた。

そんな風に戯れる二人を、少し離れて見ていたニースは、

「うゝ……」

口を尖らせて、拗ねた表情を見せる。

そんな表情に驚きつつも、何故か嬉しそうな顔をしたロンドが、
「面白くないって顔してるぞニース」

笑いを堪えながらそう言った。

「なんだか……面白くありません……」

これ以上見てるのが辛いという感じに、レキ達から目を逸らすニース。

「やれやれ、百聞は一見に如かずと言っただろう？ まさかこうも早くに経験する羽目になるとはね。それで……どうする？」

「どう……とは？」

「まさか我らが誉れ高き姫騎士殿が、戦乙女ともあろう者が、指を啜えてただ見ているだけと？」

「で、ですが……今レキ君は会話中です。ここで間に入るのは礼を失するではありませんか？」

一人この場を楽しんでるロンドは、出遅れている戦友に年長者としての確なアドバイスを送る。

「そう難しく考えるものではないよニース。男女の仲というのは、我らが良く知っている戦いとは異なる所は同じさ。自らが持ち得る最大戦力で意中の相手を――落とす。そこには順番も礼節も、ましてやルールすら無いのだよ」

ロンドはそう言って、両手の拳を撃ち合わせる。

「な、なるほど……戦いであるのなら——」

ニースは、これを仮想戦場における城攻めと仮定した。

——目標は……と、とても可愛いあの少年。弱点は……今の所不明。

ただ、数少ない接触から得られた情報を整理するに、どうやら『これ』に過敏に反応していた気がする。

ニースはそう考えながら、自らの胸に手を当てた。あの夜、レキに『もにゅもにゅ』された感触は、今でも鮮明に思い出す事が出来る。なんとなくそれは『えっち』な行為の気がして凄く羞恥を感じる。だが、ロンドの助言には『ルール無用』とある。

——つまり、奇襲による目標の即時殲滅が有効……という事ですか。騎士としては正々堂々という矜持ですが、なるほど……確かに戦場で甘い事を言ってられませんね。

奇襲の原則における速度の重要性は、今更語る事は何も無い。

ニースは素早く作戦を纏めると、直ぐに行動を開始した。

その姿は、まさに槍騎士の名に相応しい見事な『槍』の突撃であった。

ぼによん——

その音と感触に、レキの思考は一瞬停止する。

軽い衝撃と共に訪れたのは、表現出来ないくらいに柔らかな物体。何故こんなにも柔らかいの重力に逆らって前に突き出てるのだろう？ と混乱した頭で思う。

『槍』という名の肉饅頭を押し付けられた少年は、その感触を鮮明に記憶していた。

「ニ、ニ、ニースさん!？」

見るまでも無く、ニースがレキのもう片方の腕を掴み、その豊満な胸を『ぶにゅ』と押し付けていた。

余程恥ずかしいのか耳まで赤くしているが、掴んだ腕をしっかりと抱きしめ、

「ど、どうです……？ な、何か感じますか……？」

甘く震える声でそう言った。

「……や、柔らかいです」

それしか答えようが無かった。

それは見事な誘惑に、レキは頭がくらくらして来た。

「お、お気に召しましたか？」

「それはもう……よ、よいお手前で……」

「嬉しい……」

花のように恥じらいを見せつつも、攻めの一手を続けるニース。

少女の深い胸の谷間に、レキの腕は『むにゅ』と挟まり、凄じ光景がそこには広がっていた。

そこに、

「ちょ、ちょっと貴女！ 私のレキに、な、なな、何してるのよ！」
啞然としていたティンクが正気に返り、レキの腕を胸の間に挟むといういやらしい行為に耽るニースへ怒鳴る。

そしてレキを奪い返すように抱きしめる腕に力を込めて引っ張る。

「レ、レキ君は、この感触がお気に入りなんです！」

ニースも負けじと胸を押し付ける。

「ま、まって二人共！」

片方は、まだ未成熟の青い果実が『こりこり』で、妹みたいに思っていた少女の意外な成長に驚き。

片方は、それはそれは極上の完熟した果実が『ぷるんぷるん』でレキの性欲を痛いくらいに刺激した。

「本当に待って！ お願ひ！」

レキも男の子である。可愛い顔をしているがれっきとした男の子である。

先ほどから野次馬の見物客達、その中でもうら若き乙女達が、レキの下半身を見て顔を赤く染めていた。
だが、

「レキは黙ってて！」

「ま、負けませんっ！」

レキを間に挟んで勃発した戦争は、もはや誰にも止めようが無かった。

そんな原因の一翼を担った男、ロンドは、

「過ぎたるは及ばざるが如し……同情するよ少年」
楽しそうな笑みを浮べた。



「……ニース様お探ししました。そろそろお時間です」

そう言って現れたのは、女騎士の格好をした一人の女性。朽葉色の髪をポニーテールで纏めた気の強そうなツリ目美人。

ニースに掴まれてるレキを一瞬怪訝な目で見るが、すぐに興味を失ったようにニースへと視線を戻す。

「え、嘘！ もうそんな時間？」

ニースは慌てるが、掴んだ腕は放さない。

「隊長！ 急いでください！」

「す、少し待って！」

ニースは女騎士にそう言うと、レキを熱い眼差しで見つめ、

「……改めて言います。私の名はニース。ニースⅡザ・ヴァルキュリアス・オブ・クイーン。戦乙女の第三称号を持つ槍騎士です。この聖地を守る神殿騎士団の中でも疾風騎士団の隊長を務めています」
「……戦場を駆け抜ける一陣の風……万軍」
ヴァイスレギオン

それは単機でありながら、万軍に匹敵する圧倒的な戦力。たったの一人で戦況を覆す事が出来る決戦兵器。『ひとでなし』の二つ名であつた。

「そう……呼ぶ者もいます」

レキの言葉にニースは顔を伏せる。

そして、

「私が……恐くなりましたか？」

震える声でそう言った。

「えっと、次からニースさんに会いたいと思ったら、何処に行けば会えますか？」

レキは恥ずかしそうに顔を赤くした。

「え？」

「こ、これからも……ニースさんと一緒に居たいって意味ですよっ！」

「っっ！？」 あ、ありがとうございます！ も、もし……私に用向がある時は、疾風騎士の詰め所に来てくだされば……その、その……」

まるで予想外の答えだと言わんばかりに、ニースは驚き、うろたえ、顔を真っ赤にした。

それは、まぎれも無く初々しい乙女の仕草で、とても『万軍』の二つ名を持つ者には見えなかった。

「隊長……そろそろ……」

「……わかりました。そ、それではレキ君……その、また……で、いいのかな……？」

信じられないほどの美少女なのに、ためらう様にそう言うのと、両手を体の前で組むと、指を落ち着かないように動かす。少女のムチムチプリンとした巨乳が、両腕で挟まれて凄い事になっている。

「必ずまた！ 時間が出来たら必ず尋ねて行くね！」

「はい♪ 心より……お待ちしております」

リースは心底嬉しそうに可憐な笑みを浮かべると、丁寧に、そして優雅にお辞儀してレキ達の前から去っていった。

「あれの相手をしようと思ったら、一国を落とすほどの戦力がいるぞレキ君」

ロンドは去っていくリースの後姿を見ながらそう言った。

「それこそ……望む所です」

対してレキは、なんとも勇ましい返事を返す。

そんなレキにロンドは、

「……戦争をしに来たのかと、聞いても宜しいかな？ レキ君……いや、レキ殿と言ったほうがよろしいか？ それとも――閣下でしょうか？」

とても鋭い目つきで詰問するような厳しい口調で言った。

「レ、レキ！」

ティンクが顔を青くしてレキに抱きつく。

レキはティンクを守るように背後へ下げると、

「戦いに来たつもりはありません。ボクはボクの用事と、後……頼まれごとを果たしに來ただけです。つまり、おつかいですよ」

「その言葉を信用しろと言われるのか黒騎士殿？」

「むむ……随分と詳しいんですね？」

レキは困ったなという顔になる。

「ええ、妹の手伝いを無理やり遣らされていますので、嫌でも覚えてしまうのです。改めて……名をお伺いしてもよろしいですか？」

「うーん、別に隠すつもりは無いから言ってもいいんだけど……内緒にしてくれると助かるかな」

レキは何故か頬を赤くして、所在無さげにモジモジと体を動かした。

「この国に害をなさない限り、我が剣に誓って口を噤みましょう」

「は、恥ずかしいから一度しか言わないからね!」

レキは真っ赤な顔で Rond に近寄ると「よいしょー」と背伸びし、彼の耳元で、

「ボクの名は、レキ。レキⅡザ・ダブルファング。牙の第二称号を持つ黒騎士だよ」

囁くように言った。

「や、やはり!! 黒き双牙殿でしたか……! アーリントン王国最強戦力……黒狼騎士団団長にして、黒い死神……もう一人の『万軍』の二つ名を持つ最強の騎士! 一人の騎士として……お会い出来て光栄です」

畏まって頭を下げようとする Rond。

だがレキはというと、

「も、もう止めて……ボクのライフはもうゼロだよ……」
両手で恥ずかしそうに顔を覆い隠し、涙声でそう言った。

「レ、レキ殿?」

「むー! だ、だから言うの嫌だったんだ! く、くく、黒い死神とか死ぬほど恥ずかしいんだから二度と言わなでよね! そ、そりゃ以前はそういうの少し格好良いかなとか思ってた……それっぽい格好をした事もあるけど、もう卒業したの! 黒歴史なのー!」

レキの悲痛な叫び声がアルビオレの青空に木霊した。

6節（後書き）

レキきゅん可愛いよレキきゅん（＊、＼、）ハアハア
こんばんわスタジオぽこたんです。

ツンデレとデレデレの対決でした。

言い換えると、

ペッタンとボインの……………おや、こんな時間に誰か来たよう——

少し加筆修正。

1節

1

「それで……これからどうするおつもりで？」

ロンドの質問にレキは、

「うーん、本当はもう少しこの都市を観光したかったんだけど、騒ぎになるのも困るし。先に用事をすませちゃおっか？」

ティンクに向かってそう言った。

すると彼女は露骨に嫌そうな顔になる。

「ダメだよティンク、お母さんとの約束でしょ？　それにボクがここに居る理由でもあるんだから」

「わかってるわよ……」

意外と素直に返事。だがティンクは胸元で腕を組むと、プイッと顔を背けた。

そして、

「私だって……負けてられないもん」

それは誰に言った台詞なのかレキには判らなかったが、そこには強い決意が籠められていた。

——良くわかんないけど、やる気になってくれたかな。

レキはそんなティンクの様子を見て、満足そうにウンウンと頷いた。

「ボクも居るんだから寂しくないない♪」

まるで妹をあやすように、頭をよしよしと撫でようとするレキ。だが、

「こ、子供扱いしないでよ！　バカバカッ！」

いつもは照れながらも喜ぶはずの行為に、ティンクは怒って手を振り払う。

「ティンク？」

レキは驚きつつも、不機嫌の原因が判らずに困る。

そこに、

「話は纏まりましたか？」

ロンドが絶妙の間合いで口を挟んできた。

「えっと……そうですね。先にボク達がここに居る用事を果たそうと思います。案内をお願いできますかロンドさん」

「それは……レキ殿としての、正式なお願いと見てよろしいのですか？」

ロンドの言葉には深い重みがあった。

レキは礼節にのっとり右手を胸に当てる。

「レキⅡザ・ダブルファンクとしてのお願いです。鉄壁の盾騎士ロンド」

「――承知しました」

「それじゃ『統合参謀本部』まで案内をお願いします」

それはイリスの軍事を司る心臓部、国防の要。全ての騎士団を束ねる『頭脳』が存在する場所。

決して外敵の進入を許してはいけない聖域であった。

その事に、ロンドの眉が一瞬ピクリとはねる。

だが彼は、ただ短く、たった一言。

「こちらです」

右手を胸に当て、少しお辞儀をすると、左手を前へ出した。

その姿には騎士としての矜持と、覚悟が垣間見えた。

そこに、

「……待ちなさい、その貴方」

驚くことに、ティンクがロンドを呼び止めた。

「怪我……してるんでしょ？ 出なさいよ」

「驚いたな判るのかい？ これでも怪我には慣れてるし、動きには出さないように気をつけていたのだが」

「私を誰だか……知ってるんでしょ？」

拗ねた口調でそう良いながら、チラッとレキを伺うティンク。

レキは黙って頷いた。

「怪我してる人が目の前に居るのが嫌なだけ……親切とかそういうんじゃないから！ いいから早く出して」

「あ、ああ、それではお願いする」

ロンドはそう言うと、レキに刺された二の腕部分を前へと出した。

ティンクはソツと手を掲げると、目を閉じ祈る。それは一瞬の出来事だった。

「もう良いわよ」

「な……」

絶句とはまさにこの事だ。

まるで撫でるかのように手をかざしただけで、決して浅いとはいえない傷が一瞬にして癒えている。

恐るべき癒しの奇跡であった。

「百聞は——とはまさにこれだな。見ると聞くでは大違いだ。感謝します姫殿下」

「礼なんていらないわ」

ティンクは踵を返すと、レキの側へと「あゝ怖かった」と言っレキの腕をギュッと掴んだ。

「うんうん、偉いよティンク！ なでなで♪」

「だ、だから、子供扱いするなって——ふ、ふにゅ……」

何とか反発しようとするが、撫でられた瞬間、猫のように気持ち良さそうに目を閉じるティンク。

なんとも微笑ましい光景が広がっていた。

だがロンドは、そんな二人を見て内心肝を冷やしていた。

「ティンクⅡザ・フェアリーベル。『妖精の鈴』という希少な称号を持つ、アールブの巫女……」

誰にも聞こえない小さな声でそう呟くロンド。

「最強といわれる黒狼騎士団の戦力と、あの癒しの力が加われば……もはや敵う国などあるまい。対抗出来る『存在』があるとするならば――」

鉄壁の異名を持つ盾騎士は、今日の前にある脅威に対して何か『対策』を考えずには居られなかった。



『統合参謀本部議長室』

そう書かれた部屋の前にレキ達は居た。

廊下にまで赤い絨毯が敷かれ、眼前の古いながらも高級感と気品を感じさせる扉からは、強烈な畏怖と敬意を覚えた。

それは500年という長きに渡り、聖地を死守してきたというその実績。その為に流れた騎士達の血の重みであった。

その……はずだった。

「ちゅ、ちゅぱ、れろ、れろ……ちゅ、ちゅうー」

「んーっ！ んっ、ふはぁ、ま、待って！ まっ――んちゅー！？」

レキの声は虚しくも彼女の口内へと吸い込まれた。

それは酷くアダルトな大人のキスだった。

少年の穢れを知らない唇は、女性の艶やかな唇、そして真っ赤な

舌で蹂躪され、口腹内を甘く吸い上げられ、歯の裏側まで愛撫された。

しかも女性は、成熟した肉体を惜しげもなくレキに押し付けてくる。

突然の行為にレキは為す術が無い。

ティンクは魂が抜けたような表情になっており、ロンドは死んだような顔になっていた。

孤立無援。絶体絶命。

追い詰められたレキは必死の反撃に出た。

必死で舌を絡め、唇を吸い、体に指を這わせた。

だが稚拙な少年の攻撃など、眼前の女性には露ほども効いては居なかった。

「……だが、筋は悪くないぞ少年……これは、ご褒美だ……じゅる……」

「や、やめ——て——」

悲痛——でも無い叫び声が室内に木霊した。

「はあ、はあ……」

頭の中が明滅するような強烈な快楽を口内から叩きつけられ、レキは思わず膝を着く。

対人戦で、ここまで一方的に勝られたのは初めての経験だった。

少年は悔しげに床を叩く。

「……それはで本題に入りましょうか」

突然の凶行に及んだ女性は、まるで何事も無かったかのように、ずれたメガネを戻し、服の乱れを正した。

ただ、赤いルージュの乱れた後だけが、先ほどの行為の激しさを物語っている。

それは、紫の髪を肩口でバッサリ切ったセミロングで、大人の雰囲気がとても色っぽい美人な軍人さんだった。紺色のフォーマルな

軍服を見事に着こなし、胸元ははち切れんばかりに膨らんでいる。そしてタイトなミニスカートはドキツとするほど短い。黒のガータベルトに、黒のヒール。そして知的な銀縁のメガネが特徴的だ。

「あ、ああ、貴女！！　な、なんて事してくれるのよーーーー！！！！」

正氣に戻ったティンクが火山の噴火の如く怒りの雄たけびを上げる。

「なんて事とは、口付けの事か？　それとも粘膜交換とでも言え方がいいかな？」

女性はいやらしく唇に指を触れた。

「レキは、レキは！　誰ともキスした事なかったのにーーーー！！！！」

「おや？　初物だったのか……それは重畳。安心しろ少年。私も……初めてだ。どうだ？　結婚でもするか？　言っておくがこれでも私は尽くすタイプだ」

知的美女のお姉さんは、カツツカツツとヒールの音を鳴らしながら、レキへと近づくと再び唇を――

「だめええええー！！！！」

ティンクがぬいぐるみを奪い返すように、レキを抱きしめる。

「あ、貴女いい加減にしなさいよ！　な、なにが結婚よ！　初対面でしょう！？」

「ふむ、確かにそうだ。だが、この少年は私の好みなんだ。ドストライクと言って良い。まさにそう……一目惚れだ」

お姉さんは表情を全く変えずにそう言った。

だが、その瞳は危険な色でギラギラと輝いている。

レキは本能的に、貞操の危機を覚えた。

「レキも、レキよ！　あんな女に奪われるなんて！　これならもつと早くに私が――」

涙目のティンクは、頬を赤く染めて、

「レキのバカ……ちゅ、ちゅう、ちゅぱ……ちゅう」

微かに震える体でレキに覆いかぶさるティンク。

不器用な、歯と歯がぶつかる幼いキス。だが不思議と胸が切なくなるよう強い思いがティンクから伝わってくるのをレキは感じた。

「むむ……やるな……そういう初々しい雰囲気は、私にはとても無理だ」

幼い行為にふける少年少女、それを興味津々に観察するお姉さん。ロンドは酷くなる頭痛に頭を抑えながら、事が済むのを待つしか無かった。

そこに、

コンコン――

「疾風騎士団隊長、ニースです。火急の用向きと聞き、急いで参りました」

「うむ、入れ」

更なる爆弾が投下されようとしていた。

1節（後書き）

こんばんわ、スタジオぽこたんです。
感想等お待ちしております。

それでは

2 節

2

「レ、レキ……君!？」

扉を開けたニースが見たものは、床に押し倒されて妖精のように愛らしい少女から、熱烈な口付けを受けるレキの姿だった。

「ニ、ニースさん!？」　こ、これは……違うんで——んちゅ、まっ——ちゅうう——」

ティンクを引き剥がし、言葉を放とうとしたレキの口に、今度は先ほどの軍人お姉さんが奪うようなキスをして来た。

「ふふ、隙ありだぞ少年。ここが戦場だとしたら、君は既に5回は死んでいるな。ちゅ、ちゅば……れろれろ——」

ねっとり舌を突き刺しながら、少年の口内をくすぐる女性。

そんな光景にニースは、

「い、いい加減にしてレオノーラ!　こ、これは何の冗談ですか!？」

顔を真っ赤にして怒鳴る。

「言葉は正しく使え疾風騎士団隊長。今の私は『イリーネ』だ」

「統合参謀本部議長にして統括作戦総長イリーネ!　私のレキを離して下さいっ!!」

「それは出来ない相談だニース」

「な、何故です!？」

「私はこの少年に惚れたんだ。ぞっこんラブといって良い。それが離したくない理由だ」

イリーネと名乗った女性は、これ見よがしにレキを抱きしめて見せた。

「——っ!」

ニースは酷く動揺して後ずさりし、レキを一瞥して——

「――レ、レキ君の浮気者っ！」
逃げ出した。

戦乙女は自らの『戦場』から、初めて逃げ出した。
そんな部下を見たイリーネは、

「ここで踏み込んでこなくてどうする……」
小さくそう呟いた。

「そろそろ、離して貰えますか？」

不思議と沈黙を保っていた当事者であるレキは、イリーネに向かつてそう言った。

「いや……だと言ったら？」

「女の人に暴力を振るうのは本意じゃない……かな」

その言葉は必要とあらば、容赦無くそうするという決意が籠められていた。

「ふむ……どうにも本に書いてある通りにはいかないようだ」

イリーネは名残惜しそうにレキの体から身を離した。

そんな彼女に、

「またつまらん恋愛本を読んでいたのか？」

ロンドが言った。

「何を言う。ただ読むだけで、少女から人妻、王女のような存在の恋愛感を疑似体験出来るのだぞ？ 最近読んだ『羊飼いの沈黙』では、先ほどのような男と女の奪い合いになった場合。高確率で『さんぴー』なる物に突入出来ると書いてあった」

「はぁ……レキ殿。申し訳ありません我が愚妹が、ご迷惑をおかけしました」

ロンドは心底疲れたようなため息を吐く。

「な、何を言う『嫉妬は最高のスパイス』と言ったのは貴様だろう！」

イリーネは少し拗ねた顔をした。

「それについてはもう俺が実行済みだ馬鹿」

「な!？」

スパイスもかけ過ぎると、ただ辛いだけである。なんとも人騒がせな兄妹であった。

レキは、のぼせたように顔を赤くして呆けたティンクを優しく床に座らせると、スツと立ち上がった。

「レキ……殿？」

先ほどから少年の様子がおかしい。ロンドは何となく嫌な予感を覚える。

「早く本題に」

レキは自らの不甲斐無さを攻めるような苛立った口調でそう言った。

ただそれだけなのに、ロンドは威圧されたかのような圧迫感を感じ、イリーネは興味深そうに目を輝かせた。

「それでは話を進めましょう。レキⅡザ・ダブルファング。牙の第二称号を持つ黒き双牙。黒狼騎士団団長閣下」

イリーネと呼ばれる女性は、礼節にのっとり丁寧にお辞儀をした。そして、

「我がイリスと、聖王国アーリントンとの協議の結果をお伝えします。まず、アーリントン第二王女ティンクⅡザ・フェアリーベルのイリス神学校への入学を認めます。並びに王女の護衛である黒狼騎士団団長レキⅡザ・ダブルファングに国内における騎士権限を与える事とする」

イリーネはそこで言葉を切ると、

「――盟約に従い履行して下さい」

まるで呪文のようにそう言った。

対する少年。レキは、

「了解した。イリーネの名を受け継ぐ千里眼の魔女よ。今これより、この刻より、我が身は、我が軍団は、聖地イリスの預かりとする。――盟約に従い履行しよう」

レキはそこで言葉を切ると、

「そういう事だ――お前達」

まるで呪いのようにそう言った。

次の瞬間、

聖地イリスは、およそ10万を越える大軍。漆黒の重甲冑に身を包んだ黒騎士の軍団に、完全に包囲制圧された。

誰も彼もが、彼らの侵入に気が付かなかった。

全ての警戒網が、目視と、霊視と、地脈と、魔術による四重結界が、破られもせずに突破されていた。

彼らは、大剣を、大槍を、大槌を、大斧を持ち、イリスの要所要所に、突如、忽然と現れた。

そして建物の屋上、外壁、塔の上に、信じられないほど大きな大型弩砲。バリスタを装備した黒騎士達が、極大な矢、槍のような巨大な矢を番えて待機する。

更にこの部屋にも――

身の丈二メートルをゆうに越える黒騎士が二体現れた。手には巨大なメイス、狼をかたどったフルフェイスの兜、そして扉のドアよりも大きな黒鉄のタワーシールド。

見るものを萎縮させ、恐怖させる。圧倒的な存在感がそこにはあった。

「な、なんのつもりだレキ殿！」

ロンドは恐怖を打ち払い、声を荒げた。

500年もの間、一度も落とされた事の無い聖地イリスが、首都アルビオレがたった一瞬でその喉元に刃を突きつけられていた。

だが、そんなロンドの心配をよそにレキは、

「それじゃ、首都防衛陣形7の3ね。後、君達怖いから隠密状態で

待機して」

「了解しております閣下。既にそのように……」

「うん、それと姫をここに置いていく。しばらくの間護衛を頼む」

「はっ」

見上げるような巨躯の黒騎士が、少年のような背丈のレキに頭を下げる光景は、巨人を従える少年の御伽話のように見えた。

だが紛れも無く、この少女のように可愛らしい少年が、彼らの黒騎士達の王なのだ。

「レキ殿！ お答え下さい！」

ロンドは再度レキを呼ぶ。

「備えあれば憂い無しって言うでしょ？ 心配しなくてもイリスに矛を向けたりしないって、その為の『制約』をかけてあるんだから、ですよねイリーネさん」

「盾騎士ロンド、憂う気持ちもわからんでは無いが、事は国家機密に相当する。いつも通りだ」

「……理解しろ、という事ですか。承知しましたよ統合参謀本部議長殿」

「よし」

イリーネはそう言うと、レキを一瞥する。

「もう良いですよレキ殿、ニースを追ってやって下さい」
優しい表情になるイリーネに、レキは少し驚いた顔になる。

「恋愛とはどうにも教科書どおりにいかないようです。友を応援しようとして逆に傷つけてしまった。これでは『軍師』失格です」

イリーネは銀縁のメガネを外し、

「ニースの友として、ただのレオノーラという一人の女として、彼女をお願います」

礼節も何も無い。ただの丁寧なお辞儀をするイリーネ。

そんな彼女に、

「それじゃ、ボクの方からも少し知恵を貸してもらって良いかな？」

レキは困った顔で頬を掻いた。

「なんなりと」

「……す、好きな女の子に、ああいう現場を見られた場合。どうすれば良いと思う？ 実はさっきから考えてるんだけど、全然思い浮かばなくて」

それは、眼前の女性のせいで引き起こされた惨事であったが、事の原因となったのは間違いなく自分の、不甲斐無さと、優柔不断のせいだとレキは思っている。

なればこそ、自らの手で事を、関係の修復を、可及的速やかに（A S A P）実行する必要がある。

急いで二ースを追いたい気持ち強いが、ここはまず作戦を立てるべきだとレキは判断した。

「私なら、その場で『さんぴー』なるものを持ちかけるぞ」

イリーネは、両手を腰に当て、自信満々の表情で言う。

「お前の意見は参考にならんから黙ってろ」

「ぶ、ぶう……」

「レキ君、こういう場合。何が正解って答えは……おそらく無いと思う。女を怒らせた場合、男に出来るのはただただ誠意を見せる事だけなんだ。許してくれるかは――相手しだいだな」

ロンドは、何故か遠い目をして、ばつが悪そうに頭を掻く。

盾騎士の女性関係が、垣間見えた瞬間であった。

「誠意……ですか。わかりました」

レキは静かに頷く。

そして「うへへ、レキとキスしちゃったあ……」と今だ呆けているティンクを見ると、

「彼女をお願いします。黒騎士が守っているので身の危険は無いと思うけど、起きた時ボクが居ないと騒ぐと思うから」

加えてレキは黒騎士に対して、

「御守り陣形……えっと5番あたりで良いや、よろしくね」

そう言って部屋を飛び出して行く。

黒騎士はそんな主に敬礼すると、すぐさま――何処からとも無く上質の枕とシーツに毛布を取り出し、ティンクをソツと寝かしつける。更に、小さな団扇を取り出して、不快にならないようそよ風を送る。

なんともシュールな光景が広がっていた。

「……やれやれ、私は仕事に戻るよ。盾騎士ロンド、念の為、彼女の護衛をしろ」

「今日の私は非番なんだがな妹よ」

「緊急事態である。守護の騎士としての本懐を果たせ。聖盾騎士団隊長」

「了解……ボス」

ロンドは壁に飾られてる装飾盾を取り外すと、左手に装備し、扉の横の壁へともたれる。

「それで……お前は良いのか？ 本気なのだろう？」

「勿論。だが私は軍師だ」

イリーネはそれ以上何も言わず、書類に目線を落とす。

「そんな役回りだねえ……。もう一つ聞きたい事があるんだが良いかね？」

「機密事項は話せんぞ」

「ニースが、レキ君に惹かれてるといふ情報は、一体何処で得た？」

「昨日の今日だ。情報としてはあまりに早いだろう？」

「……昨日の今日では無いからな」

イリーネはペンを止め、そう呟いた。

「どういう――」

「これ以上は乙女の機密に相当する。男は黙っている」

その言葉にロンドは、お手上げという風に両手を広げた。

3節

3

疾風騎士団、構成隊員のほぼ全てが女性で構成される戦乙女の集団。

彼女たちは誇り高き騎士であり、女神イリスの巫女であり、高い戦闘技術と神の奇跡を行使する強力な魔法戦士であった。

その名声はアーリントンの黒騎士に勝るとも劣らないもので、イリスの六騎士団でも最強の騎士団と呼ばれていた。

太陽は天高く登り、優しい日差しが降り注ぐ、午後の陽気。

疾風騎士団の詰め所からは、戦乙女達の勇ましい声が通りにまで響いていた。

朝から続く厳しい訓練は、今もなお続いている。

「右、左、右、左！ ユリイ！ 軸がぶれています！ もっと鋭く打ち込みなさい！」

厳しく声を出すのは、ツリ目が特徴的な、朽葉色の髪のパニーテール騎士娘。名はフィリア。

肌の露出が極めて高い戦乙女の戦装束。伝説の魔導鎧『ブリュンヒルデ』を着るニースと違い、フィリアは極力肌の露出を抑えた女騎士の格好をしていた。

「はい、副隊長！」

そう言って、まだ少女といえる年齢の騎士が、鋭い動作で剣を振りぬく。

逆に、ニースに憧れる彼女達は、ニースとはまた違った一般騎士向けの戦乙女の装束『ワルキューレ ver2.05』を愛着している。

ニースほどではないにせよ、肌の露出が高く、スカートの丈は非

常に短い。しかし防御力の高さは折り紙つきであった。

「よし！ 次！」

副隊長と呼ばれたフィリアは、汗一つかかずに部下の訓練を続ける。

その時、

「副隊長。ニース様が戻られました」

一人の女騎士が報告に来た。

「む、早いんですね？ わかりました。皆はそのまま続けなさい」

「「はいっ！」」

可憐で元気の良い戦乙女達の声に、フィリアは満足気に頷くと、鍛錬場を後にした。

「お帰りなさいませ、ニース様。それで統合参謀本部の火急の用とは――ニース様？」

驚くべき事に、ニースの瞳には涙が浮かび、その顔色は蒼白だった。

「な、何かありましたか！？」

フィリアはそう尋ねながらも、ニースの体を素早くチェックする。女神のように整ったプロポーション。露出度が高く、扇情的にうつる衣装には、いささかの乱れは無い。男に乱暴された形跡は欠片も見受けられなかった。フィリアは、心中で安堵の息を吐く。

「少し部屋で休みます。緊急の時以外は……誰も通さないでください」

「は、はい……了解しました……」

釈然としないものを感じつつも、フィリアは上官の命令に素直に従う。

ただ、副官としての使命だけは果たさなければならぬ。

「統合参謀本部の用向きとは、一体なんだったのです？　もし私に出来ることでしたら、ニース様がお休みの間に――」

そんなフィリアの言葉にニースは、

「いえ……ごく私的な用向きでした。貴女の手を煩わせるような事ではないわ」

その声は酷く落ち込んでおり、彼女が深く傷ついているのが判った。

美しく気高い『戦神ニース』の生まれ変わりとと言われる上官に、一体何があったのだろう。フィリアは胸が締め付けられるような思いになる。

「な、何か、私に出来る事はありませんか？　誰かに話せば楽になる事もございます！」

するとニースは少し迷いを見せた後、

「では一つ尋ねます。――Aという組織は、とても重要な攻撃目標への『奇襲』に失敗しました。その上Bという第三勢力の介入を受け、更にその第三勢力も、Cという別の組織からの奇襲を受けました」

「……三つ巴の戦況ですね……それで？」

「卑劣な罠により、肝心の攻撃目標は『人質』に取られてしまいました。ですが、Aには『目標』を救出出来る見込みがあったのに、それを見捨て、敵前逃亡を図りました。Aという組織への戦況評価を聞かせて貰えますか？」

「攻撃目標なのに、救出ですか？　酷く複雑な戦術シュミレートですね。ただ……Aという組織に限定して評価を下すのであれば――その組織は『素人』の集団かと思います」

フィリアは、ばつさりと切り捨てた。

ニースの目には更に涙が浮かぶ。

「まず、奇襲に失敗した時点で作戦の見通しが甘いといしか言えませんが、奇襲とは成功すれば戦果は非常に高い作戦ですが、失敗した場合、部隊の全滅、または人質という最悪の事態を招きます。ですの

で『奇襲』とは必ず成功させなければなりません。しかもです。第二勢力の介入を許す情報収集の甘さが問題です。情報部は一体何をしていたのですか？ 信じられない失態です」

フィリアの酷評は更に続く。

「そして何より、仲間を見捨てて敵前逃亡を図る。これは騎士としてあるまじき行為です。およそ考えられる最低の行為です。もし生きて戻ったとしても彼らが待つのは軍規における絞首刑であるのは間違いありません」

「ふえ……」

フィリアは、自身が何かとんでもない。途轍もなく大きな地雷を踏んだ事に、今更ながら気がつく。

神のように強く、そして凛々しく、可憐で美しい、あのニース様が、まるで少女のように大粒の涙をこぼして泣いていた。

「ふええええええええん」

疾風騎士団の詰め所に、ニースの泣き声が響く。
動揺したのは、神と崇めるほどニースに心酔してるフィリアを含めた隊員達だ。

「う、うそ！？ ニース様が泣いておられる！？」

「副隊長が泣かせたの！？」

「フィリア副長！ 何をしたんですか！？ はっ！ ま、まさか無理やり――」

「ち、違う！ 私は何も！」

赤い顔でそう言った隊員に、フィリアも頬を赤くして答える。

「ぐすん、ぐすん、レキ君が……レキ君があ……ふえええええん」

「レキ……君。誰のことでしょう？」

「殿方の名前に聞こえますが……」

「上級騎士団の面々に、そのような名の人物はおりません」

「これは……痴情のもつれですね」

一人の戦乙女がそう言った。それはユリィと呼ばれた少女だった。
その瞬間、

「……私達のお姉様に……」

「ニース様を傷物に……」

「きっと純真無垢なニース様を騙し、エッチなお体を……好き勝手に弄んだのよ！」

「許せない……」

「レキ……と言ったわね……」

疾風騎士団に、イリス最強と言われる戦乙女達に、不穏な空気が流れる。

「誰か！ ニース様をお部屋へ。万が一にも間違いがあつてはいけない。ツーマンセルでニース様をお守りしろ」

フィリアは副官としての使命を果たすべく、部下に命じる。

ベテランの上級騎士二名が名乗りをあげ、彼女らに大切な上官を預ける。

「最低限の部隊を残し、手すきの者は全員大会議室へ集結しろ！
事態は緊急を要する！」

「はいっ！」

大会議室に集結した乙女達の軍勢。その数およそ180名あまり。

「どうやら、一個中隊規模が集まりましたか」

「現在、非番の者、予備役の者にも連絡をとっております。それと外で活動中の三個中隊から、すぐに戻るとの連絡がありました」

「いえ、増援は必要ありません。この部隊だけでやります。事はデリケートな問題です。それに通常任務に支障を来たすなぞ論外です。私達に求められるのは、秘密裏に、そして迅速に行動可能な少数精

鋭部隊。対ゲリラ戦略を思い出さない！ 可及的速やかに事にあたります！」

「はいっ！」

「では部隊を三つに分けます。第一小隊は偽装と隠蔽を、第二小隊は秘密戦術偵察を、残る第三小隊は実動部隊です。私が指揮を取ります。『レキ』なる目標を見つけ次第、即時交戦に入ります。殺してはなりません。生きて捕らえます。ですが……手足の一、二本は許容範囲でしょう。日頃の訓練の成果を見せなさい！」

フィリアは冷たい笑みを浮かべ。

敬愛する『お姉様』を泣かせた不逞の輩への復讐に燃える戦乙女達は、今だ見ぬ怨敵に静かに闘志を燃やした。

そこに、

「た、たた、大変です！！！」

一人の戦乙女が血相を変えて会議室に飛び込んできた。

「単純明快に報告しなさい！」

「も、目標、発見しました！」

その報告に会議室は騒然となる。

「場所は！？」

フィリアは勤めて冷静にそう尋ねる。

だが、報告に来た戦乙女は、顔を蒼白にして、

「現在――我らが疾風騎士団詰め所、その玄関です！ 申し訳ありません！ 目標の本拠地への侵入を許しました！」

「な、なんですって！？」

フィリアは驚きのあまり椅子から立ち上がる。倒れた椅子の音が、水を打ったように静かになった会議室に嫌に響いた。

3節（後書き）

次回、怒りに燃える戦乙女達を相手に、レキが取る行動は！？
作者はついに解禁します。

うら若き乙女には、きっと刺激が強い展開になるでしょう。

それと質問です。

現在、縦読み小説と同じ感じで、必要以上に行間にスペースを入れない書式で書いています。

横読みのネット小説としては、読みにくいかもしれません。

そこの所どうでしょうか？

4 節

4

ニースに謝罪するため、疾風騎士団詰め所を訪れたレキは、戦乙女達から妙な歓待を受けていた。

最初、名を名乗った瞬間、全員が殺気だった様子を見せ、話してゐるうちに困惑したような態度を見せる。

「ね、ねえ、本当にこの子で間違いないの？」

「わ、私に聞かないでよ！」

「……悪い事するような子に見えないけど」

「ううん、こういう虫も殺せないって顔した子が、実は裏で女を食い物にしてるのよ！」

「きゃー、ウソウソ！？ 本当に！？」

「でも……私この子が相手なら……食い物にされてもいいかも」

「私も結構タイプかも……」

「うんうん、良いよね。女の子みたいで初々しくて……それに凄く可愛い。食べちゃいたいかも」

「やだ、やらしい！ 乙女にあるまじき発言だわ」

「ふふ、乙女でも女ですもの！ ねえ……君もそういうの興味あるよね？」

「お姉さん達と……良い事する？」

突然、戦乙女達がレキにそう言った。

「え、えっと……その……」

レキは先ほどから顔を赤くしっぱなしだ。

まず、少女達の格好がマズイ。ニースに良く似た露出度の高い戦乙女の衣装。プリーツスカートは見えそうなほどに短い丈だ。そんな甘い匂いを放つ可憐な花達に、文字通り囲まれて目のやり場に困るレキ。

更に、乙女達の赤裸々発言にも、困り果てていた。一人一人は初心な乙女でも、人数が集まると不思議とこんな風に淫らな雰囲気になる。集団という心理がもたらす力であった。

だが、面白半分に誘惑してくる乙女達にレキは、

「ごめんなさい。ボクには、心に決めた人がいますから！」

優柔不断で押しに弱い少年が、きっぱりとそう発言する。同じ轍は二度と踏まない。その思いがレキを強くしていた。

ただ、

「……………」

急に黙り込んでしまう戦乙女達。

少し不安になるレキ。

そして、

「…………ど、どうしよう私、今……………凄いキュンって来ちゃった！」

「わ、私も……………」

「ぬ、濡れちゃった……………」

「…………素敵」

「ちよ、ちよっと皆止めてよね！ き、君も！ お姉さん達をあまりからかわない！」

「ふふ、本気になりそうって感じよね」

「こ、こら！」

何故か、最初よりも甘い雰囲気が増大する乙女達。

「ほ、ほら、迷子になったらダメだから、お姉さんが手を繋いであげるね」

そう言って、一人の少女がレキの手を掴む。

「あ、ずるい！ 抜け駆け！」

「私も〜えいっ」

今度は反対の腕を掴まれる。肘に柔らかな物体が押し当てられた。

「も、もう、皆！ き、君が悪いんだぞ！」

そう言った背の高い女性は、一番大きな胸を、レキの背後から押し付ける。

何故か前からはお尻を押し付けてくる少女までいて――

「もー！ 離れってばー！！」

レキは不屈の精神で、何とか誘惑を撥ね退け、広間へとたどり着いた。

道中、色んな所とか、何故か手が濡れてたりとか、もうちょっと説明出来ない事になったが、兎に角レキはたどり着いた。

そこに、

「遅い！ お前達一体何をやって――」

鋭い声を上げるのは、朽葉色のポニーテール騎士娘。彼女は、とろけるような惚けた表情で、まるでレキにしだれかかるように甘く息を吐く六名の部下を見て、驚愕した表情になる。

広場に集結していた、戦乙女の軍団も、その光景に息を飲んだ。

――あの時ニースを迎えに来た女騎士さんだ。

「確かに油断させて、こちらへ誘導しろとは命じた！ だが、誰も必要以上に『親密』になれとは言っていない！」

真っ赤な顔で部下を怒鳴るフィリア。

そんな上官の言葉に、

「んっ、もう……終わりなの？」

「それじゃレキ君……また、後で……ね？」

「これ……私の部屋の鍵だから……」

「あ、あれ……私……？」

「あんな凄いの……初めて……」

「また、会えるよね？」

口々にそう言って、名残惜しそうにレキから離れていく六人の戦乙女達。彼女達が広間で待機している仲間の元に戻った途端、興味津々の戦乙女達がその周りを取り囲む。

「ちょ、ちよつと……一体なにしてたのよ!？」

「詳しく教えなさいよ!」

情報収集は戦の鉄則であり、戦乙女達は可及的速やかにそれを欲した。奇妙な熱気と共に。

「実は――」

「彼ってば――」

「レキ君って――」

ここに、恐ろしい伝言ゲームが始まった。

広間に入っただけは、親の敵のようにレキを睨みつけていた戦乙女達だったが、急速に広まる『噂』を耳にした瞬間、十人十色の視線を送ってくる。一体どんな噂に変化しているのか、レキは考えたことも無かった。

そんな部下の痴態を、こめかみに青筋を立てながら、フィリアはレキを睨みつけると、

「レキ殿とお見受けします。相違無ありませんか?」

凍えるように冷たい声で、そう言い放つ。

「うん、ボクがレキだよ」

「ここには、どういった用向きで参られたのです……?」

言葉遣いこそ丁寧だが、その声には明確な殺意が籠る。

殺意に敏感なレキは、それでも尚、胸をはり、

「ニースさんに会いに来たっ!」

堂々と宣言する。

何故か黄色い悲鳴が響き渡り、送られてフィリアの「うるさいっ!」という怒声が続いた。

フィリアはゆっくりと剣を引き抜く。

「恐ろしい奴め! 僅か数分の間に、我が優秀な部下を6人も籠絡するなんて……一体どんな手を使いましたか!？」

「ひ、人聞きの悪い事言わない! ただ、前へ歩いてただけだよ!」

レキは顔を赤くして答える。

ただ……柔らかな乙女達に肉体を使った『拘束』を振り払うように前へ進んだので、多少は相手に『被害』——が出た。

「ウソを付くな！ 我らがニ、ニース 様にも、そのような怪しげな術を使ったのでしょー!?」

鋭く尖った、刺突剣に属するレイピアの切先をレキへと向けるフィリア。

流石に真剣を抜いた副隊長の様子に、場の雰囲気が変わる。

「むう……冗談じゃすまないよ、それ？」

「それはこちらの台詞です。もはや……ただで帰れるとは思わないことです」

トトン、トトン、という刺突剣独特の、軽快なステップを踏みながら、臨戦態勢を整えたフィリア。

「騎士として、最低限の礼節です。名乗っておきましょう。我が名はフィリア。フィリアⅡザ・ヴァルキリー。戦乙女の称号を持つ槍騎士です。どうかお覚悟を——」

トンッ——

彼女が床を蹴った瞬間、その動きがぶれて見えるほどの神速の右突きが、疾風の如く放たれる。レキの眉間を狙ったその一撃は狙い変わらずそれを撃ち抜——

バサッ——

レキは自らが羽織っている外套を前へ薙ぎ払うように振るった。ただのそれだけで必殺の一撃はあさつての方角を貫く。フィリアの切先には茶褐色の外套だけが残った。

「ダメだよそんな素直な突きじゃ。こんなマントでも簡単に軌道って逸れちゃうんだから」

まるで生徒に教える教師の口調。

突きの体勢で、がらんだうになったフィリアの懷にレキは居た。

「はい、チェックメイト」

そして引き抜いたナイフをフィリアの首筋に当てる。

まさに、一瞬の出来事だった。

「こ、こんな……」

フィリアは死を目前にして、全身が泡立つような恐怖を覚える。

だが、

「ほら、やり直しだよ」

レキはそう言うと言わすフィリアから離れて、彼女の『間合い』へと戻る。

そんなレキの態度に、

「バ、バカにしな——」

だが、外套を脱いだレキの姿に、フィリアは言葉を失う。

それは異様な光景だった。周囲からもどよめきが漏れ聞こえてくる。

「なんなんですか……それは……」

フィリアの声は、微かに震えていた。

少年の華奢な、女の子のような細い体を覆い隠すのは、ピツタリと体にフィットした全身つながぎ。特殊な黒革と布で構成され、所々を金属板で補強されたそれは、騎士が着る甲冑と同じ一種の戦闘服。問題は……少年が身に付けている装備だ。

ナイフ、ダガー、バヨネット、小剣、小刀、短刀、ありとあらゆる種類の短剣の類が、体中に装備されていた。

その数およそ12本以上。

まるで『牙』のように短剣を身に着けた少年は「どうかしたの？」という顔で首をかしげる。

その愛らしい表情は、その異様な姿との違和感をありありと感じさせ、まるで人では無い人の形をした何か——

そう……『ひとでなし』のように見えた。

レキは眼前の少女の目に、恐怖が色濃く映るの見て、

「通してくれる気になったかな？」

乾いた声でそう言った。

「ま、まだ……まだです！　まだ私が折れた訳ではありません！」

恐怖を打ち払うように、自らを鼓舞するように、フィリアは剣を振るった。

そして――

「はあ、はあ……はあ、はあ」

あれから一時間ほどレキはフィリアの相手が続けていた。

既に少女の息は上がっており、呼吸は荒く、全身に酷い汗をかいていた。だが不思議とその表情は明るい。

「なんだか楽しそうだね？」

「ええ、こんなにも剣と一体になったのは……初めてかもしれないっ！！」

フィリアが放った神速の一撃が、レキの頬を軽く掠める。

息も絶え絶えだというのに、今の突きは、一番最初の攻撃よりも数段早かった。

「ふふ、今のは少し……惜しかったですね」

頬は上気し、汗をかいてるその姿は、妙に色気を感じさせた。

しかも、現在彼女は重い甲冑も、野暮ったいコートも脱ぎ捨て、下着同然の格好を晒している。防御を完全に捨て、攻撃一点のみに特化した姿。と言えば聞こえは良いが、もう重い装備を身につける体力が残って居ないのだ。

ちなみにフィリアは、脱いだら凄いですと言わんばかりのプロポーシヨンで、攻撃のたびに『ゆるんゆるん』動く胸の膨らみが目に毒だった。

「なんか……フィリアさん、印象変わったよね？」

「最初は貴方を、最低の男だと誤解していましたから、ツタアア！」
フェイントを挟んでからの、三連突き。見事に急所のみを狙った
攻撃を放つフィリア。

「えっと……その言い方だと、誤解は解けたんだよね？」

ナイフでその攻撃を、全て受け流しながらレキは尋ねる。

「ええ、勿論。剣をこれだけ交えれば……その人と心まで通じてしまえます。貴方の剣はとても強く遙か高みにあり、そして一片の曇りもありませんでした。そ、それに……貴方ほど……エスコートの上手な殿方にあつたのは——生まれて初めてです」

フィリアは頬を赤く染め、意味ありげな視線を送ってくる。それは明確な好意を感じさせるもので——その瞬間、レキの第六感が最大級の警告を発した。

好意の視線と共に走りこんできたフィリア。その手には剣が握られて——いない！？

——何かする気だ！

レキは身構える。

徒手空拳、素手の状態のフィリアは、右手で手刀を作ると喉元を貫く勢いの抜き手を放つ。

避けるまでも無くその一撃を首を傾げるだけで避けたレキは、自らが罠にかかった事に気が付いた。

——ぶにゅん！

突進の勢いそのままに、レキの顔面に見事な胸を押し付けるフィリア。最初の手刀を回避される事を想定した『置き』おっぱいを決められてしまった。

更にフィリアは、両手をレキの頭に回しガッチリとホールドすると、足を払って床へと押し倒す。

「ふふ、やはり貴方は紳士です。貴方の実力なら私を投げ返す事も

出来たはず。でも、きつと……貴方なら、レキ殿なら受け止めてくれると信じてました」

「むゝ、むむゝ！」

「どうでしたか、今の一撃は……？」

フィリアはそう言って押し付けてる胸を少し浮かせた。

「ぷはっ！ ご、合格だよ！ だから早くどいて！」

レキは真っ赤な顔で叫ぶ。

「レキ殿……貴方も合格です。貴方ならニース様をお任せしても良い。今なら……そう確信できます。皆もそう思うでしょう？」

「「はいっ！」」

周りを取り囲む戦乙女達から、元気の良い返事が返ってきた。

この瞬間、レキは疾風騎士団に、戦乙女たちに初めて認められた男になった。ただ、少女たちの意味あり気な視線が少し気になる。

「それじゃ!？」

「はい、ニース様との面会を我々は許可します。存分に話し合われてください」

「ありがとうございます！」

「ただ……その前に……」

「え？」

嫌な予感がする。とても嫌な予感だ。

レキは自分なりの『誠意』を示すためここに来た。彼女達がニースの部下であるなら、彼女達にも同様に『誠意』を示さなければ意味が無い。

そう思って行動した結果、彼女達の信頼を勝ち取る事が出来た。

だがしかし……何故、肉食獣に取り囲まれた『羊』の気分になるのだろう。何故、彼女達はジワジワと間合いをつめて来ているのだろうか？

レキは、ある種の恐怖を覚えた。

そこに、

「私達は、ニース様の忠実なる僕。最後に一つだけ……私達には確

認すべき事があります」

甘くとりける様な表情で、フィリアが体を擦り寄せる。

「な、何を確認するのさ!？」

「レキ君の……か・ら・だ」

「は、はぁ!？」

「男女の仲は、つまるところ体の相性です。私の母が良く言っておりました。ニース様はそれは素晴らしい肉体をお持ちです。生半可な男では満足させられないでしょう。幸い私は……見ての通り悪くない体つきです。試すには……丁度良いとは思いませんか？」

「ちょ、ちよつとフィリアさん! キャラ変わりすぎ! そんなエツチな女の子じゃ無かったよね!？」

「ずっと……押さえて、秘めて、隠して居たのに……君が……こんなにしたんだよ?」

くちゅ——

レキの膝に押し付けられた、フィリアの下腹部からは、妙な水音がした。

「ね?」

フィリアは赤い顔でそう囁くと、レキの耳たぶをカプツと甘噛みした。

「ひゃいう!？」

「ずるい、ずるい! 副長だけずるいですよ!」

「私達にも味見させて下さい!」

戦乙女たちが、レキとフィリアの周囲を取り囲む。

「ふふん、ダメよ! これは副長権限です! 悔しかったら貴女たちも偉くなりなさい!」

「「ええー!」」

「安心しなさい……貴女たちの『分』も残しておきますから♪」

「流石副長、話がわかるう♪」

「はゝなゝゝせゝゝ！」

レキは渾身の力で拘束を振り払おうと――

「ほらぁ、動いちゃダメよレキ君」

「おねゝさん達に任せて……ね？」

「ボ、ボクも初めてだけど……レキ君ならいい……よ」

そんな台詞でレキの手足を完全拘束したのは、最初に出会った六人の戦乙女。カチャカチャとベルトを外す音まで聞こえてくる。

「……存分に貪り下さいレキ殿。我々は皆、未経験の『乙女』ですから……貴方の好きな『部分』を真っ白に染めてください」

そうしてフィリアはレキの頬に手を触れると、自らの唇を――

4節（後書き）

全方位フラグ発射機のレキ君、運命はいかに！

タイトル変更しました。でへへ（＾▽＾＊）
感想もお待ちしております。

第一章前半1～3節を、加筆修正してます。

特に1節は、ニースとの出会いの少し前を書いています。

5節

5

乙女達に手足を押さえつけられ、絶体絶命の危機、貞操の危機に瀕しているレキは、

「こうなったら――」

――奥の手を使うしか無い。

そう判断する。実はこの部屋の中にも黒騎士が存在している。現在は隠密行動のため姿を消しているが、レキが呼べばすぐさま介入出来る状態だ。

ところが、

「良いんですかニース様、このままだと本当にキスしちゃいますよ？ ……いつまでそこに隠れてるつもりなんです？」

レキの唇に触れるギリギリの所で、フィリアはそう言った。

「――隠れて？」

まさかと思いつつ、レキは視線をさまよわせ、柱の影からコンソールとこちらを覗き見しているニースを見つける。

レキの視線を感じた瞬間、ニースは素早く柱の影に隠れる。

「ニースさん！！？」

レキの驚いた声と、皆の視線を受けたニースは、恥ずかしそうに柱の影から出てくると「コ、コホンッ」とワザとらしい、取り繕うような咳をした後、

「これは一体どういう事です！！」

戦場にも良く響くであろう美しき声を放つ。それは静かな怒りと、騎士としての威厳を強く感じさせる。

言った本人の頬が、見ているこちらが気の毒になるほど『羞恥』に染まってなければ、皆がその場にひれ伏していたかもしれない。

「……………」

なんとも言えない空気が漂い、それを感じ取ったニースは耳まで真っ赤に染めて「くうう……」可愛らしい呻き声をもらす。

そして、

「こ、これは一体どういひゅっ！」

大事な事なので二回言おうとして、盛大に嘔んでしまう。

綺麗な指先で口元を押さえ、いよいよニースの目には涙が浮かぶ。それはとても可愛らしい姿で、レキは今すぐ彼女にかけより、頭を撫で撫でしたい衝動に駆られた。それは周りに居る戦乙女たちもそれは同意見なようで、皆可愛いものを愛でるようなキラキラした視線になっている。

「……時間切れのようですね」

フィリアは、何処か残念そうにそう言うと、身を起こし、

「レキ殿、数々のご無礼、申し訳ありませんでした」

礼節にのっとり丁寧に頭を下げる。戦乙女達もそれに習い、レキの拘束を解き距離を置く。

「ニース様、どうかこちらへ……万事整っております」

「フィリア……貴女一体……？」

「報告します。本日13…27時、疾風騎士団領内にて目標を発見。これを拘束しました」

「も、目標？」

「攻撃目標であり、人質であり、救出対象でもある『レキ』という名の人物です。ニース様にとっての極めて重要な人物であると判断し、こちらで『最善』を尽くさせて貰いました」

あくまで事務的な口調で、淡々と話すフィリア。

そして、

「ニース様、あえて申し上げます。水臭いですと！ 我々は貴女の為の騎士です。貴女と貴女のイリスを守るための我々です」

慈愛に満ちた表情でフィリアは話す。

「そうですねニース様！ 私達は家族なんですから！」

「お姉様の恋愛相談が出来る日が来るなんて、夢のようです」

「私にとってはニース様は、可愛い妹ですけどね」

戦乙女達も、口々にそう言った。

「フィリア……それに貴女達も……ぐすん」

ニースは、部下達の思いに感動したかのように、目尻に涙を浮かべた。

「ごめんなさいフィリア。私……貴女を誤解していました。最初見た時は、レキ君を押さえつけて無理やり……その……陵辱するつもりなんだとばかり思ってたの！ 他の乙女達も、あわよくばそれに便乗してレキ君を食い物にしてる風に見えたものだから……。皆私の為を思っただけで頑張ってくれてたなんて……本当にごめんなさいっ！」

指で涙をぬぐい、花のように可憐な笑みを浮かべるニース。それは全ての穢れを祓う女神のような笑みであった。

ギクギクッ——

汚れた者達は、そんな無垢なニースの笑みに、全員が冷や汗をダラダラと垂らし、心中で自らの行いを神に懺悔していた。

「もう、調子いいんだから」

レキはそう呟くと、ジャックナイフの要領でぴょんと飛び起き、回りを警戒しながら身嗜みを整える。

そして、

「約束どおり、会いに着ましたニースさん」

「レ、レキ君……えっと……その……い、いらっしやいませ？」

何故か語尾が疑問系になっている辺り、相当緊張しているのだろ

う。

ニースは頬を赤く染めると、両手を口元でモジモジと動かし、上目遣いでレキを見つめる。

その初々しい仕草は、レキのハートを痛いほど刺激して、

「なんか、凄く可愛いですニースさん！」

「な、なな！？　レ、レキ君ッ……！」

思ったことを素直に口にただけなのに、驚くほど顔を赤面させるニース。

「レ、レキ君は……そういう台詞を簡単に口に出来るんですね……なんだかずるいです」

「ずるい？」

「なんだか、お、女の子に慣れてる感じがして、面白くありません……」

ニースの言葉には、レキに対する甘酸っぱい嫉妬心が籠められており、レキはむず痒いような幸福感に包まれていた。

「な、なんで笑うんですか！　むー、お姉さん怒りますよ？」

「ごめんなさい。でもニースさんを笑ったわけじゃなくて、その……こんな可愛い人に嫉妬して貰えるなんて、凄く幸せだなんてレキはニッコリと微笑んで見せた。

ニースは真っ赤な顔で口をパクパクとさせ、

「で、ですから……そういう恥ずかしい台詞を……こ、困ります」意地悪しないでつと言った表情でレキを睨むニース。

レキはその視線を受け、ゾクゾクするような甘い疼きを感じた。まるでもつと虐めてと欲しいと求められている錯覚を覚える。

——ボクってSなのかな、なんかニースさんって凄く虐めたくなるよ……。

「レキ君って……いじめっ子なんですね……」

「あ、あれ？　もしかして……声に出てました？」

「うん……凄く声に出てました……」

拗ねた様子で唇をとがらせる。そんな子供っぽい仕草をするニース

スの姿は今まで誰も見た事が無かった。

あまりに可愛いニースの姿にレキは、

「……あ、くう——」

下半身に急速に血流が集まる。特に一部が熱を帯び、ドクドクと脈打って治まらないのだ。それは若干の痛みを伴って、少女が見せる愛らしい仕草に連動するように強く疼いた。

「レキ君、どうかしたの？」

ニースは前かがみになり、レキの顔を覗きこむ。

重力に引かれ、ニースの豊満な胸が『ぷよんぷよん』と振り子のように揺れる。レキは思わず、そのたわわに実った大きな乳を凝視した。

すると、

「レキ君のエッチ……」

ニースは咎めるように言った。そこには先ほどの虐められた仕返しが含まれている。

「……あう」

「そ、そんなに、興味あるんですか？」

ニースの声には、何故か少し嬉しそうな響きが籠められていた。

レキは知らない。ニースは、この最強の戦乙女は、既に少年の弱点を分析しており、自らの『胸』が効果的である可能性に気が付いている事に。

「え？」

「だ、だってさっきから……私の胸ばかり見てます……」

「そ、それは……その——」

「その？」

「……興味……あります」

レキは真っ赤な顔で呟く。

ニースは驚いたように目を見開くと、嬉しそうに口元を綻ばせる。そして、

「み、見たい……の？」

胸に両手を当て、甘く震える声で囁く。

レキは覚悟を決めた。拳をギュツと握り締め、息を大きく吸い込むと、

「――見たいですッ！」

レキは男らしく、きっぱりと、宣言するように、そう叫んだ。

「――っ！」

ニースは恥ずかしそうに頬を赤らめると、一度大きく深呼吸し、意を決して――

「ど、どうですか？ その、へ、変じゃありません……か？」

胸を隠すようにしていた手をどけ、レキにその豊満な巨乳を、深い胸の谷間を堂々と晒す。

レキは食い入るように『乳』を見つめる。

戦乙女の衣装の上から胸を見てるだけなのに、そこには計り知れないほど、淫靡な空気が漂い始めていた。人目をはばからず、出会ったばかりだというのに、まるでバカップルのような痴態を繰り広げる二人。若い情熱と、おたまじゃくし並みの性知識が為せる行為であったが、そんな若い二人を止める者は誰もおらず、二人だけの空間は徐々に桃色に染まっていく。

「お、大きいばかりで……その……みっとも無いですよね？」

ニースはそう言いつつも胸の下で腕を組んだ。左右の二の腕で圧迫され、胸が『ぎゅむ』っとせり出す。女の武器を的確に使った、容赦無用の攻撃だ。

だがそれは、自らの大きな胸にコンプレックスを抱いてる少女にとって、ありえない行為。男の視線を感じるだけで不快に感じているはずなのに、どうしてかこの少年、レキには、もっと見て欲しいという浅ましい欲望を覚えた。そんな思いに突き動かされ、ニースはおもむろに胸を揺らしてみた。

ぶによん、ぶによん――

効果は靦面だった。

少年の視線が揺れ動く柔らかな膨らみを追う。それはまるで獲物を見る『狼』のような鋭い眼つき。

「……んく……はあ」

自らの行為に、少女の胸は、その心臓は、張り裂けるかと思うほど高鳴ると同時に、恐怖に震えた。それでもニースは勇気を振り絞って、見事なまでの胸のふくらみを見せ付ける。

それはまさに『誘惑』という行為であった。

少年が雄に目覚めたように、少女もまた確実に雌へと目覚めていった。

「……どう……ですか？」

レキの灼熱するような熱い眼差しを受けて、リースの体にはうっすらと汗が滲んでいた。火照る体を自らの腕で抱きしめる。

「す、すっごく魅力的なおっぱいなんですっ！」

レキは鼻を押さえて、真っ赤な顔で言った。

「ほ、本当に？」

「はい！ もにもにって感じで、ぷよぷよって感じで、その……とつてもエッチなおっぱいです！！！」

声高に宣言するその内容は、場所が場所なら捕まってもおかしくないものであったが、言った本人も、言われた当人も冷静ではなかったので問題は無かった。

現にリースは、今の言葉で感動したように、花のように可憐な笑みを浮かべ、頬を赤らめた。

言葉どおり、乳繰り合う二人。やがて、事の確信へと近づいていく。

5節（後書き）

戦乙女たちは、にまにました表情で生暖かく見守っています。
こんばんわスタジオぽこたんです。

なんか『なろう』が堕ちてましたよね。誰だ籠絡させたのは！？

第一章の1節2節辺りを、新規作成、加筆修正しました。

6節

6

「……リースさん」

レキは覚悟を決めて口を開いた。

「は、はい……」

リースもまた、覚悟を決めて返事を返す。

「あの日、あの時、一目見た瞬間から……貴女を、ニースさんを好きになりました。ボクなんかではきつと貴女には不釣り合いでしょう。でもこの気持ちは、貴女を好きだという思いは、誰にも負けませんっ！」

レキは迷いも躊躇いも無く、己が気持ちを堂々と宣言した。そして、方膝を着き畏まって頭を下げる。

それは騎士としての始まりの姿勢。騎士となる『叙勲』の時にだけに許された姿勢。騎士の道を誓う誓約の構えであった。

「騎士として、一人の男として、貴女の側に、貴女を守る騎士として——永遠の誓いを」

少年の言葉に、周りで事の推移を見守っていた乙女達からどよめきが聞こえてくる。

少年の言葉それは、騎士として、男として、愛するものへ捧げるプロポーズの言葉であった。

ニースは、驚きとも喜びともつかぬ切ない表情を浮かべ、胸元で手をギュッと握り締める。

そして誓約を願うレキへ、

「その言葉……とても嬉しく思います。私がただの女であったなら……きつとレキ君の胸の中に飛び込んでいたと思います。ですが…

：私はイリスの剣であり、盾であり、この国を守る護国の鬼……修羅の一匹です。既にこの身はイリスに捧げています。誰かの妻になる事はありません。ましてや……レキ、貴方は他国の騎士、貴方と私は……相容れぬ存在です」

ニースは、今にも泣き出しそうな顔でそう言った。

これこそが、ニースが、この少女が、後一步踏み込めなかった『言い訳』。

イリーネの時も、フィリアの時も、間に割って入ることが出来なかった『言い訳』。

そして、懸命に涙を堪えながら、口を開く。

「ですが、貴方がこの国に居る間、その一時の間なら、貴方だけの……『女』になります。この体も、この心も、貴方の好きにして下さってかまいません」

そこには、死にたくなるほどの自己嫌悪と、それほどまでに譲れない乙女の思いがあった。

レキはニースの言葉に、ただ頭を下げたまま、黙り、『拒絶』した。

「恥知らずな事を言っているとわかっています。貴方の騎士の誇りを傷付けた事もわかっています。でも……好きなんです。レキ君が……好きなんです！　どうか受け入れては貰えませんか……？」

この国を守る戦乙女として、『万軍』としての絶大な戦力から、ニースは自由な恋愛も、婚姻も、許されては居なかった。

ましてやレキは他国の、以前は敵国の大将閣下だ。

それでもニースは、永久の誓いが許されなくても、ただ一時の爛れた関係で終わったとしても、生涯においてレキ以外の男性を愛する事はない。そう心の中で神に誓い、レキに懇願した。

だが、

「心惹かれる提案だけど、ごめんね。それだけは絶対に嫌だよ」

一時の愛人契約をレキは、ばつさりと斬り捨てる。

ニースは、レキの言葉を半ば予想していたのか、一瞬悲しそうな

顔になるが、ただ静かに微笑んだ。

「今の言葉は忘れてください」

「うん、忘れるね」

「さようなら……レキ君……」

愛しています。と言葉を紡ごうとしたニースは、その気持ちを封印するように口をつぐんだ。

こうして二人の思いは、その気持ちは、通じ合ってるにも関わらず、決して交わる事は無く、酷く悲しい結果に終わった。

それが運命であり、定められた未来であった。

だが――

「じゃ、もう一度プロポーズからやり直すね」

レキはそう言くと、ぴよんと立ち上がり、服をパンパンと叩いた。

「え……?」

驚いたのは悲しそうな顔をする戦乙女達と、ニース自身だ。

「このボクが、たった一度の失敗で諦めると思ったの?」

運命を切り開くのは、いつでもただの馬鹿だと相場は決まっている。

そして中でもレキは、とびつきり最高の馬鹿だった。

「堅苦しいのは、やっぱり苦手だよ。ここからはボクの流儀でやるからね」

レキはニースの眼前にテクテクと歩いていく。

「ボクはニースさんが、大好き！ ニースさんはボクの事どう思ってる？」

「それは！ ……さ、先ほど口にしました……」

突然の展開に圧倒されながらも、ニースは困惑して口を閉じる。

「……嫌いな？」

「——っ！ き、嫌いなわけありません！ 好きに決まっています！」

「うん、ボクもだよ」

真っ赤な顔になるニースに、レキも頬を赤くして言った。

「ボクが他国の騎士で、以前は喧嘩してた相手だからダメって言うなら、まずそこから取り除くね」

レキはナイフを引き抜くと親指を少し斬り、血を滲ませる。

「な、なにを——」

「まあ、見ててよ……——我が血の盟約に従い。ここに血の盟約書を印さん」

それは血の盟約書と呼ばれる『誓約』の呪い。

誓約を破れば、即座に死の報復が履行される、拘束のギアス。血の雫が地面へとこぼれ落ち、血のように真っ赤な魔法陣が現れる。

レキは朗々と呪文を唱え——

「今これより、この瞬間より、我と、我が軍団、その全てを、我が愛する乙女に捧げる。永遠の忠誠を——」

その瞬間、真っ赤な魔法陣は、閃光と共に消え去り、ここに血の盟約書、その誓約が結ばれた。

静寂が辺りを支配する。

「ね、これで良いでしょ？」

自らの命を賭けたというのに、レキは何でもない風に首を傾げる。
だが、

「な、ななな、何してるんですかレキ君……！！」

驚いたのはニースの方だ。動揺するあまり、レキの手をギュッと握り締める。

「これで、問題が一つ解決したでしょ？」

「そんな簡単な問題ではありません！ 血の盟約書、その拘束力は魔神をも従えるほどに強大です！ 破れば即座に死ぬんですよ！？」

「破らないよ。もうボクは、貴女の、ニースの騎士なんだから」

「バカバカバカッ！ どうしてそんな簡単に命を投げ出すような真似をするんですか！ もし、万が一、君に何かあったら……私は、私は――」

ニースはついに泣き出した。大粒の涙が、頬を伝いこぼれ落ちる。
「そんなの簡単だよ。だって好きな人が出来た。それ以上に大切な事なんてボクには無いよ。ニースさんの為なら全てを捨てたって良い」

「……ずるい、レキ君はずるいですっ！ これでは私がまるで――」
「それは言っちゃダメ。それに……『覚悟』が軽かったのはボクの方。最初から……こうすべきだったんだ。悲しませてごめんね」

レキはそう言うと、再びニースの前で方膝を着くと、畏まって頭を下げる。

それは先ほどと同じ姿勢。だが決定的に違う何かが、二人の心に灯っていた。

「我が名はレキ。レキⅡザ・ダブルファング、牙の第二称号を持つ黒騎士、黒い死神、黒き双牙、黒狼を束ねる者、万軍と呼ばれる者。忌み名は星の数ほどあれども、今はただ、愛する者を守る為、ただそれだけの騎士。青き戦乙女。天に至る者よ。どうか……お願いです。ボクの名を呼んで下さい。ボクだけの――愛する主よ」

切なく懇願するように、それでいて息を飲むほど清廉とした意思を、声に乗せ思いを乗せて告白する。

一人の女として、これほどまでに真摯な愛を向けられて、感じな

いは居ないだろう。

現に少女の頬を赤く染まり、瞳は喜びに濡れ、呼吸は甘く乱れた。少女は少年の思いに報いるべく震える口を開く。

「貴方はきつと……私を買い被っています。本当の私は、世間知らずで、嫉妬深く、戦う事意外は、およそ『出来損ない』と言って良い存在です。殺す技しか、滅する技しか知らぬ『ひとでなし』です」
ニースの告白を、レキはただ黙って聞いた。

「なにより私は『ヴァルキュリアス』です。戦場を駆け抜ける死を呼ぶ風です。男の後ろに守られてるような女ではありません。戦う時は、殺すときは、私が前に、常に先陣を切ります。剣も、槍も、矢も、返り血も、全て私が先に受けましょう。それが——貴方に耐えられますか？」

ニースは右手をソツと前に出す。

「それこそ……臨むところだよ」

レキはゆっくりと顔を上げた。

「私は……レキ君が思ってるような女ではありませんよ？」

「うん、本当に！　ボクが思っていたよりも、遥かに、ずっと、素敵な女の子だよ！」

少年の頬も、少女に負けないくらい赤く染まっていた。

ニースは、怯えるように一瞬手を震わせると、

「最早……是非は問いません。その……もう、離してあげませんか——あ、あとで返品しようとしてもダメですからね？」

耳まで赤くしたニースは、意を決して少年の右肩に手を乗せる。

「——ボクの名を呼んで……ニース」

レキは少女の手に自らの手を重ねる。

そして、最後の言葉を口にした。

「——レキ……レキ！　レキ！！　私だけのレキ！！　私だけの可愛い騎士！　永遠に、永久に側に仕えて……二度と私を離さない

で下さい！ 変わりに私は、全ての事象から貴女を守る者となります！ レキ……大好き、大好きです！ 心から——愛しています！」

聞いているものが恥ずかしくなるほど甘い告白を、騎士を『叙勲』された少年は、その場でスツと立ち上がり、

「永久の忠誠を誓います。ボクの可愛いマスター」
甘い、とろけるように甘い、誓いの口付けを、永遠の誓いを二人は交し合う。

こうしてレキと、ニースは、誓約の元、正式な夫婦となった。
爆発するような歓声と、盛大な拍手が、暖かく二人を包み込んだ。

6節（後書き）

こんばんわスタジオぽこたんです。

如何でしょう？ 甘く感じてもらえたら幸いです。

1節

1

大地が震える地鳴りの音が、森の中に木霊する。森に住まう動物達は怯え、鳥達は空へと逃げ去った。

巨大な何かが、狂ったように森の中を蠢く。木々はなぎ倒され、岩は打ち砕かれ、そして、

ギヤシャアアアアアアアアアアアッ！！！！

身の毛がよだつ雄叫びを上げて、そいつは姿を現した。

それは獣と呼ぶにはあまりに大きく、魔物と呼ぶにはあまりに圧倒的で、見るもの全てに畏怖と、あるいは恐怖からくる尊敬を集める存在。

過去と現在の全ての事象において、もっとも強大で、単一生命体としては最強と呼ばれる種族。

最強であるにも関わらず、驚くべき多様性を持つ彼らの種族を総称して名付けられた言葉。それはあまりに適切な表現で、それ以外の名は存在しない、それほどに当て嵌まる言葉。人々はたったの一言で彼らを呼んだ。

『龍』と――

イリス近郊に程近い大規模な緑林地帯に、一匹の龍が忽然と姿を現した。

それはあまりに巨大で、まるで小さな山のような大きさ、翡翠色に輝く鱗、発達した四肢、巨大な尾。

生命種の王者としての圧倒的な風格を持つソレは、『翡翠石の古^{エメラルドドラゴン}龍』と呼ばれる古龍族の一種であった。

古龍は鋭く尖った巨大な牙が立ち並ぶアギトを大きく開くと、大量の大气を吸い込む。その口腹内に一瞬『焰』^{ドラゴンフレス}がきらめいたかと思うと、大地を灼熱の地獄と変える竜の息、原初の焰を吐き出した。全てを焼き尽くす焰の嵐に、かの者に敵対する存在は散りも残さず灰燼に帰する——その筈だった。

竜の息の直撃を受けたはずの敵は、まるで何事も無かったかのようになり、ゆっくりと大地を踏みしめ古龍に歩み寄る。

最強の生命体と呼ばれる者が、生命種の王者が、太古を生きる龍が、眼前の敵に『威圧』されていた。龍は、生まれて初めて、この世界に存在してから初めて感じる感情に、狂ったように雄叫びを上げながら攻撃を繰り返す。

やがて——

全ての攻撃が無為に終わると、王者は、最強の者は、目を血走らせ、口からは血の泡を吹きながら、最後に一度だけ吼えると、文字通り尻尾を巻いて逃げ出した。

『翡翠石の古龍』は最後まで、その感情が何であるかに気付く事は無かった。

古龍が感じたもの、それは『恐怖』と呼ばれる感情であり、生きるものが持つ最初の感情。『生命の危機』に対する自己防衛機能であった。

だから古龍は逃げる。

戦って勝てる相手では無い、自分が敵う相手では無い、逃げなければ死ぬ、死んでしまう、死んでしまう、死んでしまう——

龍は泣いて居た。その目からはボロボロと涙がこぼれ落ちていた。

龍が逃げていく後姿を見つめるソレは、目を少し細めると——遙か彼方で、何かが砕け、潰れ、引き裂ける音と共に、凄絶な龍の叫喚が、慟哭のように森中に響き渡る。

龍をあつさりと殺してみせた『尋常ならざる存在』は、ゆつくりと踵を返すと森の中へと消えていく。まるで『ナイフ』のように尖った牙が、一瞬だけ太陽の光を反射させ、その存在を浮かび上がらせる。

それは一匹の巨大な獣……。漆黒の毛並みを持つ『黒狼』だった。



その日、ティンクは、アールブの姫君は、怒り心頭に達していた。眼前には、ちょんもり正座して、しょんぼりしながら説教を受ける幼馴染、レキの姿がある。

「一体どういう事か、私が納得いく説明をしてよね!!?」

「だ、だから、何度も言うように、ニースさんと婚約したんだってば!」

何度も聴かされたその言葉に、ティンクは胸が張り裂けそうになる。

「な、なんでよ!　なんで急にそんな話になったのかって聞いているの!!!」

「テ、ティンク……」

目尻に涙を浮かべながら怒る少女に、レキは戸惑いながら、

「ニースさんの事が……好きだから……かな?」

少し頬を赤くして答える。

このタイミングでまさかの答え。

ここはウソでも良いから、慰めの言葉をくれる物だと誰もが思う最悪のタイミングで、一番最悪のカードを切った少年に、天は最悪の展開をプレゼントした。

「レ、レキの……バカ！ アホ！ 変態！ スケベ！ すけこましい！ も、もう、レキなんか女の子になっちゃえばいいのよッ！！」

ティンクの怒声にあわせて、彼女の魔力が、神意が暴走し、周囲に凄まじい衝撃はを放つ。そしてそのまま部屋を飛び出して行く。

レキはというと、正座というどうにもならない体勢で、もろに衝撃波の直撃を受け、窓から面白いように転落した。

「おやレキ君……やけにダイナミックな登場だね。斬新だよ」

レキを尋ねようと宿の玄関に居たロンドは、目的の当人が空から降ってきてカエルのように地面に叩きつけられるのを見てそう呟く。対するレキは何も答えない。ロンドはふと少年の顔を覗き込む。

その目はぐるぐると渦を巻いており、完全に気を失っている。ティンクが発した衝撃波の威力を物語っていた。

「同情するよレキ君……」

ロンドは同類相憐れむという、優しい目でレキを見つめた。

「それで……どうしてここに来るのかね？」

デスクで書類の山を、信じられない速度で処理していくイリーネ。部屋の端に座る一人の少女に、困ったような顔をする。

「他に行く所なんて無いもん……」

ティンクは三角座りをして、膝に顔をうずめる。頬に残る涙の後が痛々しい。

「はあ、やれやれ……私はこれでも多忙なのだ。子供のおままごとなら、他所でやってくれないか？」

「な、なんですって!？」

辛辣なイリーネの言葉に、ティンクが反応する。

「わ、私のレキに対する気持ちがおままごとだって言うの!？」

「好きだというのなら、何故今まで行動に出なかった？　これは想像でしかないが、チャンスは幾らでもあっただろう？　欲しければ力づくで奪い取る。恋愛とは一種の戦いだ。意中の相手を寝取られた君は、レキ君に対してそうさせないほどの存在になっていたのかい？」

「そ、それは……」

「ぼやぼやしているから、大事な初めてを、私のような初対面の女にすら奪われるのだ。まあ……レキ君のガードの甘さは相当な物だったけど……でも、それも君の責任だろう？」

イリーネはメガネを外すと、静かにティンクを見つめる。

「おそらく君はレキ君に近づく女性達、その全てに何かしらの妨害をしていたのだろう。随分と過保護に育てたつもりだろうが、逆効果だったな。彼は『女』に対しての適切な接し方をおよそ理解していない『男』の子になっているぞ？」

「そんな事無い！　レキは見た目幼く見えるけど、立派な紳士よ！　女性へのエスコートだって凄く上手なんだから！」

「そう、誰にでもね……」

「え……」

「レキ君は、女性であれば誰にでも『最高』の紳士っぷりを見せるんだ。言葉遣いは幼い雰囲気だが、行動の端々にそれは凄い女性への気遣いが伺える。あのギャップは……クラッと来るぞ？　特にレキ君はあの美少女顔だ。警戒心を持たれずに女性の心へと深く入り込み、鋭いナイフでトドメを刺す。昨日一日で一体何人の女性が、彼に墮とされたと思っている？」

イリーネは深いため息をつく。

「ウ、ウソばかり！ あのレキが……あの鈍感バカが……そんなにモテるわけ……」

ティンクはどうして良いのかわからず、うろたえた。

そんな少女に対して、イリーネは意地悪そうな笑みを浮かべると、「彼をこのままにしておけば、そうだね……。一年後にはこの出産率も大幅にあがるだろう。勿論、皆レキ君に何処か似ている可愛い赤ちゃんだろうさ」

「そ、そんなにモテてるの！？」

ティンクは思わず立ち上がった。

「ああ、特にニースへの告白が不味かったな。あれは——刺激が強すぎた。現場に立ち会った乙女達は、まるで自分が告白されたかのようにレキ君に惚れてしまっているぞ？」

「な、何人くらいなのよ？」

「疾風騎士団のおよそ2割って所だから、200人ほどになるか？」

いずれも容姿端麗でスタイルも中々の美少女揃いだ」

「……………」

ティンクは顔を伏せ黙り込む。

「さあ、どうするねアールブのお姫様。状況は、戦況は、まず最悪と言って良い展開を見せているぞ？」

イリーネは楽しそうに片目を閉じる。

「私……戦うわ！ もう逃げない！ レキを……必ずこの手に取り戻して見せる！ どんな手段を使っても！！」

胸に手を当て、騎士の誓いを立てるようにティンクは宣言した。

その言葉に、

「よくぞ言ったアールブの姫。ティンクIIザ・フェアリーベル！ 僭越ながら私も『千里眼』を名乗る軍師だ。及ばずながら力になるう」

イリーネはメガネをかけなおすと、豊満な胸を強調するように胸の下で腕を組むと、高々にそう言った。

「貴女は……どちらからというトニースさん側じゃなかったかしら？」

ティンクは怪しい女を見る目つきで、イリーネを睨む。

「ふふ、軍師という商業病かね。劣勢を見ると不思議と加勢したくなるのさ。ここでアールブに恩を売るのも悪くない」

「ここまで来て、ウソはやめて貰えるかしら？　ことレキに関して私の感の冴えは、予知に達するのを知らなかった？」

凜として立つ少女。

短いスカートがフワッと舞上がり、少女の健康的な脚線美が目まぶしい。

ティンクは腰の部分に手を当て、まさに王族の風格を漂わせる。

そこには先ほども泣いていた、甘い少女の面影は無い。

「これは頼もしい。でしたら私も手の内を明かしましょう。なるほど確かに姫君の感は正しい。私はね……正直な所『嫉妬』しているのです。最初こそニースの思いをかなえて上げたい、ある種親心に近い感情があった。でも……いざそれが成就してしまうと、今度は可愛い娘を取られたという感情と、娘の相手を誘惑したいという感情、それに純粹にレキ君を思う『乙女』の感情が入り乱れてね……。正直、持て余していた所だよ」

イリーネは甘い匂いを放つ毒の花のような、危険なほどに淫靡な笑みを浮かべた。

ティンクは、

「わ、悪い女が居るわ……」

ちよっとドン引きしながら、イリーネを見つめる。

「ところでティンク嬢、君は『既成事実』という戦略をしっているかね？」

「……っ!？」

ティンクはボンツと顔から火を噴いた。

「……知っているようだね。なら話は早い……実は――」

ここにもう一つの女の戦い。その火蓋が切って落とされた。

1節（後書き）

さあ、盛り上がって？ 参りました。

攻勢に出るティンク達、レキは果たして！？

そして謎の『黒狼』の正体は・・・？

感想評価等お待ちしております。

2節

2

ティンクとイリーネが結託し、悪巧みを企むのと同じ頃――

疾風騎士団隊長室。

それは歴代の戦乙女、その隊長格が使用する士官用の個室。

だがその部屋は、乙女の部屋にしては酷く殺風景で、およそ飾り気というものに欠ける室内。そこに二人の乙女が居た。

「……すみません隊長、もう一度お願いできますか？」

少し呆れた口調でそう言ったのは、副隊長であるフィリア。

「で、ですから……こ、恋人というのは、一体何をすればいいのかと尋ねているのです！」

羞恥に頬を赤らめ、少しやけくそ気味に言ったのは、疾風騎士団隊長、ニースその人だった。

フィリアはニースの言葉を受け、大きくため息をつく。

「どうすれば……では無く、何を……と尋ねられますか？ まさか根本を聞かれるとは思いませんでした」

「な、なんだか、そこはかとなくバカにされてる気がします……」

「バカにしているのです隊長！ ニースさまは既に恋人という関係を通り越して婚約、夫婦の誓いを立てられたのですよ！なのに一夜あったにも関わらず、まだ手も握っていないとはどういう有様ですか！？」

フィリアは隊長用のデスクをドンツと叩く。

「恋人に、夫婦になられたからと安心していては、あっという間に思っている人を他の女に奪われてしまいますよ？ 愛の誓いの継続は、世界平和の維持と同じほど困難なものなんです。努力無しに愛が燃え

続ける事はありません、幻想です。ぶち壊しです」

きっぱりとした口調で言い捨てる副官にニースは、

「レキ君は、そんな薄情な方ではありません!」

椅子から立ち上がり反論する。

「確かにあの方は、自ら積極的に浮気に走るような殿方では無いようです。ですが……残念ながら女性からの『誘惑』には非常に弱いと言えます。この私が身をもって確認したので間違いはありません」

フィリアは自信満々に腰に手を当て、胸をはった。豊満な少女の乳房が『ぷよん』と上下に波打つ。

「そ、そんな事、確認しなくても結構です!」

ニースは拗ねた表情でフィリアを睨む。

今までは露出を控えた女騎士の格好をしていたのに、昨日から急に露出の高い戦乙女の衣装を着るようになった副官の変わり様に、ニースは違和感と、一抹の不安を覚えた。

「甘いですニース様、現在レキ殿は、多くの雌豹の格好の獲物になっています。誰もが皆、隙については彼を誘惑しようとするでしょう」

「それは……本当ですか!？」

椅子に座りなおそうとしていたニースは、再びガタンツと立ち上がった。豊満なフィリアの胸よりも、二周り大きな乳が『ぷよんぷよん』と上下左右、無尽蔵に蠢く。

「はい、私を含めた疾風騎士団の乙女達は皆、レキ殿にぞっこんです。身を捧げても構わないと思っています」

「ねえ、フィリア……気のせいかしら? 今、私を含めたって言わなかった?」

「き、気のせいです」

「ねえ、フィリア……どうして顔を逸らすの?」

「ニース様がとても怖い顔で、私を睨むからです」

「むううう」

嫉妬に自分がかんなくてしまいそうだとニースは思った。

レキの事が好きで好きで、大好きで、溜まらない。自らの意思では、力では、これっぽっちも制御出来ない感情に、少女は戸惑い、悩み、それでも少年への思いを止める事が出来ない。自らの思い、レキへの愛情に、ウソ偽りは無い。レキもきつと自分と同じ気持ちのはず。そう信じてはいるものの、不安は何処からか無限に湧き出てきて、ニースを暗澹とさせた。

「レキ……」

ニースは力なく椅子に持たれかかる。

実に十年越しの思いが実った少女は、その思いの深さから、簡単には動けなくなっていた。

そう、ニースはレキに一目惚れではあった。

だが、あの夜が最初の出会いでは無いのだ。

それは極ありふれた、語るほど感動的でも、秘めるほど神秘的でも無い、誰にでもある幼き日の出会い。

だがニースはそれを、今までずっと、レキだけを思い続けていた。出会ったからずっと、戦場と合い間見えたときも、命を賭けて刃を交わしたときも、あの再開の夜も――

「会いたいよ……」

切ない声でそう呟く。

そこに、

「……会いに行けばよろしいではありませんか」

フィリアが先ほどのように呆れた口調で言った。

「か、簡単に言わないで！　まだ私には騎士としての業務が残っています。それに午後からは統合参謀本部で会議もありますし、とてもそんな時間は……」

「現在のニース様の最大業務は、基本的に緊急時における予備待機です。つまり……大事が無ければ基本的に役立たずです。それに、日常的書類仕事、些事な事象は全て私で処理できます。加えて本日の会議には、後2時間と52分ほどあります。……――まだ言いましょうか？」

懐中時計を取り出して、一気にまくし立てたフィリア。

「ねえ、フィリア……どうして今日はそんなにトゲトゲしいの？
まるでイリーネのよう」

「嫉妬心から来る浅ましい女の性さがです。どうか気になさらないで下さい。あと、イリーネ閣下は私の師ですから、似てるのは仕方ありません」

「——っ！ ……わ、私の口からは……何も言いませんからね？」

「ええ、それで結構です。もしこれで慈悲を下さるようでしたら、私は迷わずに行動したでしょうから……」

ニースは最早なにも言わず、席を立つ。

そして、

「疾風騎士団副隊長、フィリア・ザ・ヴァルキリーに命じます。私はこれから緊急かつ重大な案件を処理するため戦線から離れます。留守の間隊長格権限を与えます。……最善を尽くしなさい」

ニースは威風堂々とした出で立ちで、右手を払うように動かし命じた。

好きな人に、恋人に、夫になる人に、ただ会いに行く。それだけの事は『乙女』にとっては、まさに一戦交える戦なのであった。

「了解しました隊長。そして決断おめでとうございます。そんな隊長に我が戦乙女達からの、心ばかりの贈り物です——どうかお受け取りください」

フィリアはそう言うと、一つの紙袋を取り出した。

「なんですそれは……？」

ニースは興味津々とはかりに、それを覗き込む。

「衣類……ですか？」

——それにしても頼りないというか、薄いというか……
まるで下着のような……。

「はい、それは下着に類する衣服です」

「こ、これをどうしろと？」

「勿論ニース様が、着るのです。サイズは完璧です」

ニースは恐る恐るソレを取り出してみて、真っ赤な顔で袋に戻す。
「な、なな、なんですかコレは！？ あ、穴が、穴が開いていました！！」

「はい、それはそういう行為をする為の下着です。具体的に申しますと『性行為』です。男女の『いろは』も覚束無いニース様に、最適の一品をご用意しました。これでは誰もが持つ本能とやらに身を委ねれば万事丸く収まります」

「こ、こんな破廉恥な下着、着れません！」

ニースは顔を真っ赤にして、紙袋を突き返す。

「ニースさまは『既成事実』という作戦をご存知ありませんか？」

「……っ！？」

その瞬間、ニースの顔から火が噴出したかと思うほど、耳まで赤くした。

「ご存知でしたか、でしたら話は簡単です。これを着て——」

「……わ、わかりました！」

具体的に行為の内容を説明しようとしたフィリアの言葉を、ニースは慌てて遮る。

「フィリアの、皆の気持ち、ありがたく頂きます」

顔を真っ赤にしたまま、紙袋を受け取るニース。

そして、

「フィリア、ここまで来たからには恥を忍んでお願いしたい事があります！ 私は、今までこのような物を、身に着けた事ありません。ですから……その……」

紙袋を胸に抱きかかえ、両手の指先を恥ずかしそうに合わせるニース。少し潤んだ瞳からは、同性から見てもクラッとなるような色香を感じさせた。

「ええ、勿論。お手伝いします」

「あ、ありがとうフィリア！ このお礼は必ずします！」

その言葉にフィリアは、一瞬躊躇うような表情を見せたものの、
「……ではニース様、代わりと言っては恐縮ですが……。もし上手

く事が運んだ暁には、この私にも……その……出来れば……お慈悲を下さいませんか？」

そい言ったフィリアの顔は、泣きそうなほど真っ赤に染まっていた。

ニースは胸がズキンと痛むのを感じ、そしてフィリアも同じ痛みを感じているのだとニースは理解する。

「……………」

それはとても奇妙な感覚だった。嫉妬と供に感じたのは、とても強い仲間意識。疾風騎士団の隊員として、命を、寝食を共にする、かけがえの無い仲間だから、第二の家族であるから感じた思いであった。

「……本当は……嫌だと言っておきます。度量が狭いとか、器が小さいとか思われても、嫌な物は嫌なのです！ ですが……レキ君が良いというのなら……私は我慢します。これが私に言える精一杯です」

「——はい！」

顔を背けて離すニースの言葉に、フィリアはただそう返事を返す。その表情には隠しきれない喜びが溢れていた。

ニースはそれを見て「もう……」と少し拗ねた表情をする。

こと恋愛に置いて、とても不器用な二人は、互いの念願を成就させるべく、こうして手を取り合った。

「ではニース様、さっそくお召し物を……」

「えっとお……こ、これって本当に着なきやダメ？」

「ダメです。心配されずとも、似合うというレベルの話ではありません。完全に殺せるレベルです。悩殺と言っておきます。きつとあの方は獣のようにニース様に、あんな事や、こんな事を強要するでしょう。お赤飯を炊いて帰りを待っております」

「ううう……」

ニースは指先で摘んだ『紐のような物体』を、真っ赤な顔で見つ

めた。



同日同時刻――

「こ、これってまさか……」

「ほう知っているのか？ そう……例のアレだ」

ごく短いやり取りをしたのは、何故か暗い部屋でランプの明かりだけを頼りに密談を交わすティンクとイリーネ。

ティンクは紙袋に収められた物を見て、口内に溜まった唾を飲み込んだ。

「こ、これさえあれば……」

ティンクは指先で摘んだ『紐のような物体』を、真っ赤な顔で見つめた。

2節（後書き）

テインク&イリーネチームが、作戦を立てる中、
ニース&フィリアチームも負けてはいません。
モテモテのレキ君は、果たしてどうなるのか？
レキ×ロンド 展開はありえるのか！？（まで

感想評価等お待ちしております。

次回をお楽しみに！

3節

3

緊張に震える手で、ソツと手を触れた。それは生々しい感触と、黒光りする艶やかな光沢を放っており、レキは思わず甘い吐息を吐く。

「や、やめたまえレキ君……き、君はそんな子じゃないはずだ」

ロンドが困惑した声でそう言う。

だが、レキはそんな声を無視して、愛しげにソレに頬ずりをした。

「はぁ、凄い……硬い……」

「くっ、止めるんだ……皆に見られているんだぞ？」

「ううん、ダメ……ボクもうこんなの見せ付けられた……我慢できないよ」

少女のように細い指先で、撫でるように鞄を擦る。

その手つきは酷く淫らで、ロンドは激しい興奮を覚えてしまう。

「……はぁ、はぁ、ねえ、ロンド……お願いだよ。……ボク、コレが欲しいの……ボクに……頂戴？」

驚くほど長いまつ毛に潤んだ瞳、頬は発情したかのように桃色に染まり、今も甘い吐息をロンドの厚い胸板に吹き付ける。

「ダメだ……私には妻が居るんだ……」

「へえ、ロンドって結婚してたんだ？ ……でも奥さんが居てもボク気にしないよ？」

ゾクゾクするような声色で、ロンドの胸に『の』字を書くレキ。

「しょ、正気に戻れレキ君ッ」

「一回だけ……今回だけで良いから……ねえ、お願い？」

「……ほ、本当だね？」

「うん、ボク……約束するから……」

「くれぐれも……妻には――」

「ボクこれでも……口は硬いんだよ。だから、ね？ 安心して……」
レキはそう言うのと慣れた手つきでチャックを下ろして行く。

「ま、待て！ やはり——」

「ダメッ」

ロンドの静止も聴かず、チャックの中に手を挿し入れ、盾騎士の大事な物をコリコリと弄る。

「あは♪ こんなに……素敵だよロンド。本当はもう出したいんでしょ？」

「ぐっうう……」

「ほら、一杯出して？」

「すまんセシリー……俺は——」

もはや少女にしか見えない、レキの色仕掛けにロンドは屈服した。これまでも多くの苦い経験をつんでるはずの盾騎士は、それが悪魔の誘惑だと判っていても、魅入られたかのように——

——財布から大事な金貨を取り出した。

「お会計は124万Gになります」

店員は覚めた口調でそう言った。

「ぐお！？ た、高すぎる！！ 騎士装備がフルセット買えるでは無いか！？ ……な、なんとか負けて貰えんか？」

「ダメです」

「そ、そこをなんとか……せめて月賦に！」

そんな風に、店員と熱い攻防を繰り広げるロンドを尻目に、捜し求めていた念願の『ナイフ』を手に入れたレキは、すこぶる上機嫌であった。

「捜し求めていた『炎神の欠片』がこんな所で見つかるなんて♪ ボクってなんてラッキーなんだろ！」

炎神の欠片、それは500年前の神魔戦争において、戦神ニースが振るった神槍アグニが砕け散った際の欠片だと言い伝えられてい

る。

協力無比な焰の魔力を宿しており、欠片となってもなお、一振りで湖を蒸発させたと言われるが、500年経った今では小さな種火が生まれる程度の魔道具になっていた。

「ふふ、これで7つの欠片が全て揃ったよ♪」

レキは、黒光りする鞆に包まれたナイフを胸に抱きしめ、嬉しそうに飛び跳ねる。

どうしても欲しいものだったが、手持ちのお金が足りずアーリントンからの仕送りが来るまで、ロンドからお金を借りたのだ。

「はあ……一緒に魔道具屋を巡りたいっていうから付き合ったのに……まさか財布代わりになるとは……とほほ」

店員との熱い鏝迫り合いを終えたロンドが、疲れた口調でやって来た。

「ありがとうロンド！」

レキはテテテツと駆け寄ると、親愛のハグをロンドにする。

「う、うむ……喜んでもらえたら——」

「あ、あれってロンド様と、レキ君じゃない!? ウ、ウソ、二人ってああいう関係なの?」

「キャーウソウソ! ど、どっちが受けなのかしら? や、やっぱりレキ君よね?」

通りすがりの戦乙女達から、ちよっぴり腐った視線を浴びせられるレキとロンド。

レキは気にした風はないが、ロンドは眉間にシワを寄せて、

「レキ君。なんというか……色々誤解を招くから、はなれて貰えると助かるんだが」

心底疲れたため息を吐く。

「うん、お金は必ず返すからね! ロンド大好きだよ♪」

その発言に、周りから黄色い悲鳴が沸き起こる。

「だ、だからレキ君……はあ、もう諦めよう。というか君、ワザとやってるだろ？」

「てへぺろ♪」

イタズラがバレた子供のように、舌を出して笑うレキ。

ロンドは明日からの噂をどうやってもみ消すかに、真剣に頭を悩ませた。

「それでえっと……さっきの店が最後の魔道具屋さんなの？」

大通りから外れ、外壁に程近い最後の魔道具屋を出た二人は、そのまま外壁へと続く高台へと登る。

中央区に戻るにはこっちが近道だと黒騎士達の情報でレキは把握していた。高台に登る道中、隠行で姿を隠している黒騎士達とすれ違う。

——うん、隠行は完璧だね。

「ああ、これでイリスの有名な魔道具屋はあらかた回ったぞ」

「そっかあ……」

結局、あの時のガラス工芸品の露天商をしているお婆さんの情報は、何処の店でも聞けなかった。

「レキ君。いや……レキ殿。やはりこの辺りにも黒騎士達が居るのかい？」

「うん、さっきすれ違ったよ？」

「なっ……」

ロンドは驚き振り返る。もちろん姿を確認する事は出来ない。

「……一体どれほどの黒騎士が、この都市に居るか教えて貰えないか？」

「どうしてまた」

「彼らは一体何者なんだ？ 姿は見えず気配も感じられない。部下の報告では食事をしている感じも無いとの事だが？」

警戒するようなロンドの声色にレキは、

——10万も居るなんて言ったら倒れちゃいそうだね。
言わないでおうと思った。

「ロンドが心配するような事にはならないから、安心してよ」
「君の事は……そうだな。悪い子では無いと確信に近いものがある。
だが……君の騎士団はどうだ？　どんな精鋭騎士だって、中には必ず腐ったリングが混じる。我らイリスの六騎士団だって例外では無いのだから……」

ロンドが言葉には深い重みを感じる。

それは人である事の弱点の一つ。どんな優秀な集団でも、多くの人が集まれば、中には邪悪な心を持つ者が出てしまう。これはどんなに注意していても、罰則を厳しくしても消える事が無い。まさに『腐ったリング』なのだ。

「もし……万が一。ボクの騎士達が悪さをしたのなら、その時はロンド。貴方がボクを斬れば良い。騎士の誇りにかけて抵抗はしないよ」

レキはロンドの目を真摯に見つめ、言葉を紡いだ。

「君は……本当にずるいな。そういう言われ方をすれば、騎士であるなら、騎士であるからこそ、信じてない訳にはいなくなる」

先ほどの子供っぽい態度から、急に大人びた騎士としての態度。その落差は、ハツとなるほど少年の持つ人間性を輝かせる。

「なるほど……これはモテる訳だ。——詮無き事を訊ねました。申し訳ありませんレキ殿」

「うん」

レキはただ短くそう言うと、テテッと階段を駆け登る。

ロンドは小さく嘆息すると、ゆっくり階段を登っていった。

「それはそうと、先ほどの炎神の欠片は本物なのかい？　あれは贋作が沢山出回ってる上、言い伝えも信憑性に欠けるって話だが」

ロンドはこれが良く出来た偽物だと判断していた。

確かにある一定の魔力を感じるが、それも値段相応と言った所だ。とても伝説に聞くほどの力は感じ無い、と。

だが、

「ん？ これは本物だよ間違いなく。触ったらわかるもん」

レキはそう言うと、黒鞘から短剣を引き抜く。

太陽の光を反射して光り輝く刀身は、まるで焰が燃え盛る瞬間を再現したかのように荒々しく攻撃的なデザイン。

「これって刀身自体に籠められた神意が消えちゃって、今は小さな種火くらいしか出せないんだけど……。ふふ、面白いのを見せてあげるね」

レキはそう言うと、両手で短剣を握り締め――

バチッ――

一瞬稲光が走ったかと思うと、膨大な神意が短剣に注がれた。

次の瞬間、

「なッ――!？」

「どう、凄いでしょ？」

レキの手には、真紅の焰で形作られた一振りの『刀』が出現していた。

「えいっ」

レキは分厚い外壁へと焰の刀を突き刺した。

耐魔術用に強化されてるはずの壁が、まるでバターのようにヌルヌルと斬れていく様子に、ロンドは驚愕する。

「ってこんな感じで、この子達は大量の神意を注ぐと、それぞれ色んなタイプの『武器』になるんだ。この子は刀みたいだね」

気軽な口調でレキは言うと、焰の刀を、元の短剣へと戻し鞘へと収める。

だがそれは、この武器が本物の『炎神の欠片』であり、『国宝級』の魔道具である事を示していた。

とてもじゃないが100万G程度のお金で買える代物じゃ無い。
値段なんてつけられないが、仮に値段つけるなら20億Gはくだらないだろう。

「私は……とんでもない失態を犯したのでは……」
気苦労の絶えない盾騎士であった。

ちなみに、後日レキとの怪しい噂が妻の耳に入り、更にとても高価なプレゼントをしたという歪められた事実も耳に入っており、幾ら弁解しても許してくれない怒れる妻の機嫌をとる為、更に高い買い物をするはめになるのだが、それはまた別の話。

「もうすぐお昼だけど、何処かでご飯でも食べる？ お礼にボクがご馳走するよ」

「いや、午後から会議があつてね。それに妻にはお昼には戻ると言つてあるから、きっと食事を作って待つてくれてるだろう」

「愛妻家なんだロンドは」

「妻が怖いだけさ」

ロンドは苦笑いを浮べるが、そこには妻に対する深い愛情を感じた。

「じゃ、ボクも宿に帰るかな」

「君の方は、あれからニースとどうなんだい？」

「う……」

途端にレキは、顔を赤くして言葉に詰まる。

「ほほう……その様子じゃまだ進展してないようだね？ ダメだぞレキ君。恋人同士に、夫婦に近い関係になったからといって、それで終わりじゃないんだよ？ むしろそこから血の滲む様な努力が必要になってくるのさ」

「なんか、凄い実感が籠ってるんですけど？」

ロンドの言葉に、レキは汗をたらりと流す。

「妻とは大恋愛の末、結ばれたが……まあ、色々あるのさ……。騎

士としてでは無く、一人の男として忠告しておく。私なんかを食事に誘う暇があるなら、ニースを食事に誘いなさい」

「はぁーい」

レキは手を上げて返事をする。

「うむ、よろしい。それじゃレキ君、私はもう行くよ」

「ロンド！ 今日はあるがとうね！」

ロンドは軽く会釈した後、その場から去っていく。

一人残されたレキは、外壁から見える美しい景色を眺め――

「……来ちゃったか」

レキが見つめる景色、遠くに広がる広大な緑林地帯に、一筋の狼煙のような黒煙が微かに立ち上っていく。

「ここに至って、最後の炎神が見つかったのは僥倖だったかな」

手に握る『炎神の欠片』を一瞥したのち、

「全軍に通達」

少年は、酷く冷たい声で命じる。

「これより状況を開始する。――戦争準備」

3節（後書き）

レキの意外におちやめな所を描いてみました。
弄られキャラになりつつあるロイド君哀れ！

次回は濃厚な性描写が含まれる予定です。
それでは

4節（前書き）

若干性的な表現が含まれます。

4 節

4

もうすぐお昼時。泊り客の食事の用意に、宿の女主人は慌しく働いていた。

この宿は500年近くの歴史を誇るイリスでも一番の老舗宿。歴史があっても格式ばった高級宿では無く、何処かホッとする。まるで自らの家のような暖かな空気が流れる宿であった。

そんな雰囲気を入った常連客でいつも賑わう宿だが、今のシーズンには神学校の受験生とその家族で常に満員御礼、猫の手も借りたい程に忙しい。

「大広間でお食事になるお客様と、そうでないお客様を間違わないで、あと208号室と301号室のお客様は、夕方に戻りますから――」

宿の女主人が、メイド服を着た女性スタッフと話す中、一人の女性が宿を訪れた。

巫女の白ローブに身を包み、フードを目深にかぶった女性。人相は判らないが、立ち振る舞いに気品の高さが滲み出ている。

「いらっしやいませ！ ご宿泊ですか？」

もしそうであるなら、現在部屋の空きは無。丁寧にお断りして、組合を通して別の宿を案内しよう。女主人はそう考えていた。すると、

「いえ……この宿にレキという少年が泊まっていますよね？ その方と……その……」

女性は恥らうように言葉を濁す。

長年宿を経営している女主人は、このような雰囲気的女性を沢山見てきた。それは愛の逢瀬であり、逢引であり、一目をはばかって

行われる秘密の密会であった。

本来そういう事は、それ専用の宿で『する』のだが、中にはこうやって一般の宿を使う方々もいる。

女主人は暗黙のルールで、詳しくは聞かずカウンターの下から、とある魔道具を取り出した。

「規則でございますお客様」

それは『虹の水晶球』という触れた者の心の内を色で表す魔道具。もし悪意、害意を持つ者であれば通すわけにはいかなかった。

巫女の女性は、ソツと水晶球に手を触れる。

「も、問題ございません」

女主人は人目から隠すように、慌てて水晶球をカウンターの下へと戻す。

こういう事は今まで何度も経験しているが、ここまで、これほどまでに輝く『桃色』は見た事が無い。

これから行われるであろう激しい行為を思うと、まだ女盛りの30歳である女主人は、下腹部が熱くなる思いがした。

「こちらが……鍵になります」

「あ、ありがとう」

ソツと差し出された鍵を素早く受け取った女性は、丁寧にその場でお辞儀し、表情を見られないようにフードを調整すると、足早に階段を登っていく。

そんな女性を見送りながら女主人は、

「洗濯で落ればいいんだけど……」

後始末する側の人間として、そう考えずにはいらなかった。



コンコンッ――

部屋をノックする音に、戦いの準備を整えていたレキは「だれだろ?」と思い扉へ近寄る。

扉を開けたそこに立っていたのは、巫女の白ローブを纏った一人の女性、フードで顔をは見えないが――

「あれ、ニースさんどうしたの!?!」

レキにはそれが誰なのか、雰囲気で、身に纏う存在感ですぐにわかった。

だが何故か、ニースは迷うように、戸惑う様に、躊躇いをみせ、扉の前で立ちすさむ。

「とりあえず中に――」

レキはそう言って、ニースの手を掴もうと手を差し伸べる。指と指が触れ合ったその瞬間、

ドンッ――

ニースが突然抱きついてきた。

レキは少女の体温が信じられないほど熱くなっている事に驚く。更に、

「ちゅ、ちゅば、ちゅば、ちゅ、ちゅう、ちゅう、ちゅう」

首に腕を回され、唇に熱烈で濃厚な口付けを受ける。

とても情熱的で、甘く、とろけるようなキスの雨を降らせるニース。

レキは戸惑いながらも、それを受け入れ、深く、奥深くへ、舌と粘膜と、唾液を絡め絡ませ、滴らせていった。

「んっ、ちゅ、あはあ、ちゅ、れろ、れろ、ちゅ、じゅる」

互いに呼吸は荒くなり、互いの息が甘く重なり合うディープで貪るような、キスという名の性行為に耽る二人。

扉を閉めるのも忘れ、激しくまぐわう。

レキはニースを壁へと押し付け、ふとももの間には脚を割り込ませ、豊かな乳房に手を這わせながら、口撃を続ける。

何も知らない二人だからこそ、恥も外聞も無く、ただ本能の赴くまま、理性を捨て、ただ一時の快楽に興じた。

やがて、

「ああレキい、ちゅ、レキ、んっ、んんッ、レキ……ちゅ、ちゅぽ、レキ、レキい——」

触れ合う体が、唇が、舌が、粘膜が、そして交じり合う視線と、心が、少女の官能を痛いほど刺激し、恋する思いを昇華するように限界へと上り詰める。

震えの止まらないニースの体、その唇からようやく舌を抜いたレキは、壁にもたれるように崩れ落ち、震える足で辛うじて立っている少女を見つめる。

もはや言葉は必要で無い。

ニースはレキの視線の意味を受け、真っ赤に染まる顔を、更に赤く染め、ゆっくりとローブの胸元にある止め紐を解く。

上に着ていた白ローブはあっけないほど簡単に床へと脱げ落ちた。

「え……」

そのあまりの光景に、レキは興奮で茹だった頭に、少しばかりの理性が戻る。

羞恥と興奮に頬を染め、極上の体を隠すように腕で自らを抱きしめるニース。その身に纏われた衣装にレキは驚愕する。

それは一言で表すなら『紐のようななにか』。衣装というには面積が足りず、下着というには隠しておらず、ただイタズラに少女の女神よりも美しい肉体を淫らに、いやらしく装飾していた。

ニースの強引に前に突き出たオワン型の胸は、黒い紐で辛うじて支えられ、紐には可愛らしいフリルがあしらわれている。だが一番隠さなければいけないはずの双球の頂、山の頂上に位置する桃色の膨らみは、惜しげもなく外気に晒され、その圧倒的な存在感とは裏腹に恥ずかしそうにその身を『硬く』しこらせていた。

レキの視線を受けたニースは、一瞬胸元を隠そうとするが、恥ずかしそうに顔を背けたあと、胸の下で腕を組む。するとニースの腕に押し上げられた胸が『どうだ?』と言わんばかりにレキの前に晒される。そのエロティックすぎる胸の谷間の圧力に、レキは逃れるように視線を下げた。

視線を下げるとそこには、細くくびれたウエストに黒いレースの装飾が美しいガータベルト。対になるストッキングはまさかの網目模様。腰部分には丈5cmほどの超ミニ丈のプリーツスカートが穿かれていたが、隠すという効果は全く果たしていない。

そして隠していない、隠さなければいけない部分を覆うのは、お尻がT字になっており、何故か真ん中がパツクリと割れた紐状の――

「ニ、ニースさん!!? な、なな、なんて格好してるんですかぁ!!」
もしかしてその格好で……ここまで来たんですか?」

「……は、はい」

ニースは顔から火が出るんじゃないか? と思うほど顔を赤くした。

「そんな薄いローブ一枚で!? もし誰かに見られたらどうするんですか! 襲われちゃいますよ!」

「……わ、私も凄く怖かったです。男の人とすれ違うたび、怖くて怖くて……だからレキに会えた瞬間、頭が真っ白になってしまっ……」

怖がってた割には、出会った瞬間のニースの体は、異様に火照っていた。

まるで外で露出している行動に興奮していたかのような状態だ。

なんとなくレキの胸中に、黒くモヤモヤした感情が広がる。それは少年が知った『嫉妬』という感情で、抑えきれない独占欲だった。「ニースさん、本当は……ここに来るまでに興奮してたんじゃない?」

「そ、そんな!? ち、違います……私はただ……レキ君に……」
「ウソ……ニースさんから、凄い雌の臭いがするもん。発情してる雌の臭いが」

天性の獣としての才覚を持つ少年は、本能にしたがい雌を追い詰めていく。

体を撫で回すように指を這わせ、急所を攻撃する。

「んっ、あはあ……そこはらめえ!」

「なんでこんなに濡れてるの? ここっで興奮するとそうなるんでしょ?」

「正直に言わないと……お仕置きしちゃうよ?」

二本の指を中でかき回す。

「ひうつ、ご、ごめんなさいッ……」

「ごめんなさいするような事したんだ?」

乱暴に指で引っかく。

「んくう、ち、違います! レキ君にレキにして欲しくて……だから、こんなエッチな格好したのです! このようになってるのも……貴方に触れてもらえてるからで……」

「……半分は本当で、半分はウソ」

「——ッ! ど、どうしても、言わせたいんですね?」

「どうしても聞きたいな」

「レキのイジワル……」

ニースは顔を赤くして少し拗ねたように唇を尖らせる。

「——本当は道中……興奮していました。でも、す、少しだけですからね? こ、このような娼婦の姿をして、町を歩く己の無様に……そしてこれから自分は、まさに娼婦のように夫を誘惑するんだと思うと、体が火照ってたまらない思いがしたのです」

それはなんとも可愛らしい、いじらしいまでの妻の思いであり、男として喜ばずにはいられない言葉であった。

「ニ、ニースさん……」

毒気が抜かれたような表情をしているレキに、ニースは嬉しそうに、

「嫉妬……してくれましたね。嬉しいです……」
と言った。

「じゃあ、お詫びに……その……最後までしょっか」
「――はい」

ニースは恥らいつつも、ベットに向かおうとする。
だがレキは腕を掴んで止めた。不思議そうな表情をするニースへ、
「ボクの事……娼婦のように誘惑してくれるんでしょう？」
期待に満ちたキラキラした瞳でニースを見つめる。

「あ、貴方はどこまで私に恥をかかせたら……!？」

「ダメ？」

レキの子犬のような上目遣いに、ニースはあっさり陥落した。

「も、もう！ 本当に酷い人です。レキ君は将来きつと悪い男になります……」

ニースはそう呟くとレキに背を向け、壁に手をつく。
そして、

「きつと私も、悪い妻になります。こうしてはしたなく夫を誘惑する娼婦のような淫らな妻に……」

立ったままの状態で、お尻をこちらへと突き出す。

そこに見える絶景に、扇情的するぎ光景に、レキは言葉を失った。

「エッチな妻に……たっぷりお仕置きしてください……」

ニースは発情しきった流し目を送り甘く囁いた。

レキが理性を保てたのはそこまでだった。

腰から一振りのナイフを引き抜くと、見もせず投擲する。

それは神速の速さで、開いたままの扉へと突き刺さり、外開きの扉はその反動で引っ張られるように閉まった。

無駄な絶技を見せ付けた少年は、一匹の雄。一人の男に、少女は、一匹の雌として、一人の女として、互いに求める行為、愛という名の肉欲に溺れる為に――

4節（後書き）

こんばんわスタジオぽこたんです。

今回は予告どおりの展開になりました。まだ彼女が登場してないという事は、次回に続くという事ですね！ 次回も甘い展開になりそうです。

さて、私事ですが、このたび第二子が無事誕生しました。本日は終日お産に立ち会って降りました。とても辛そうでしたが、母子共に健康でぽこたんは安心しております。

そんな感動的な日に、なんてももの書いてんだよ！ とお叱りを受けるかもしれませんが、作品のテーマは『夫婦愛』ですので、何処もぶれていませんね（にこ

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8324x/>

きし☆むすっ！～恋する乙女は愛する騎士で～

2011年11月17日03時10分発行